



京都女子大學

古挽歌一百
并短歌

京都女子大學
三條西

三六一五

日向の御子を

及
予
Librar

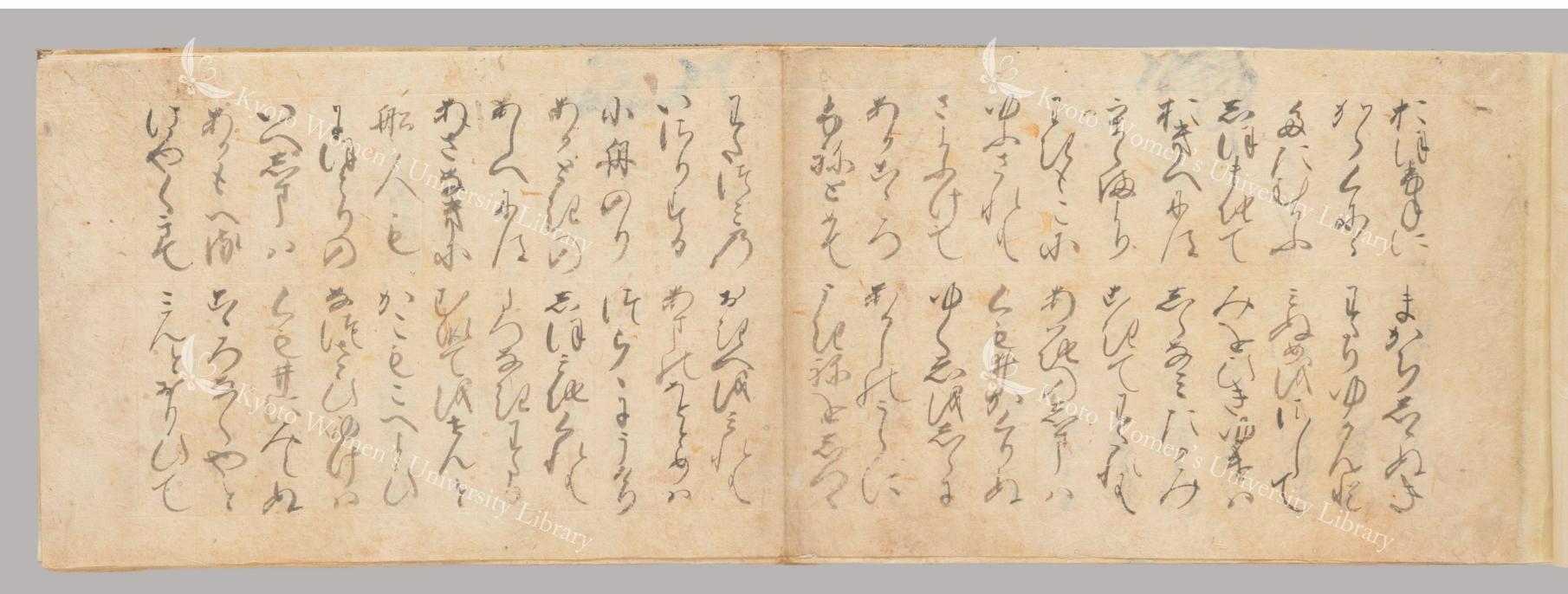
三六一六

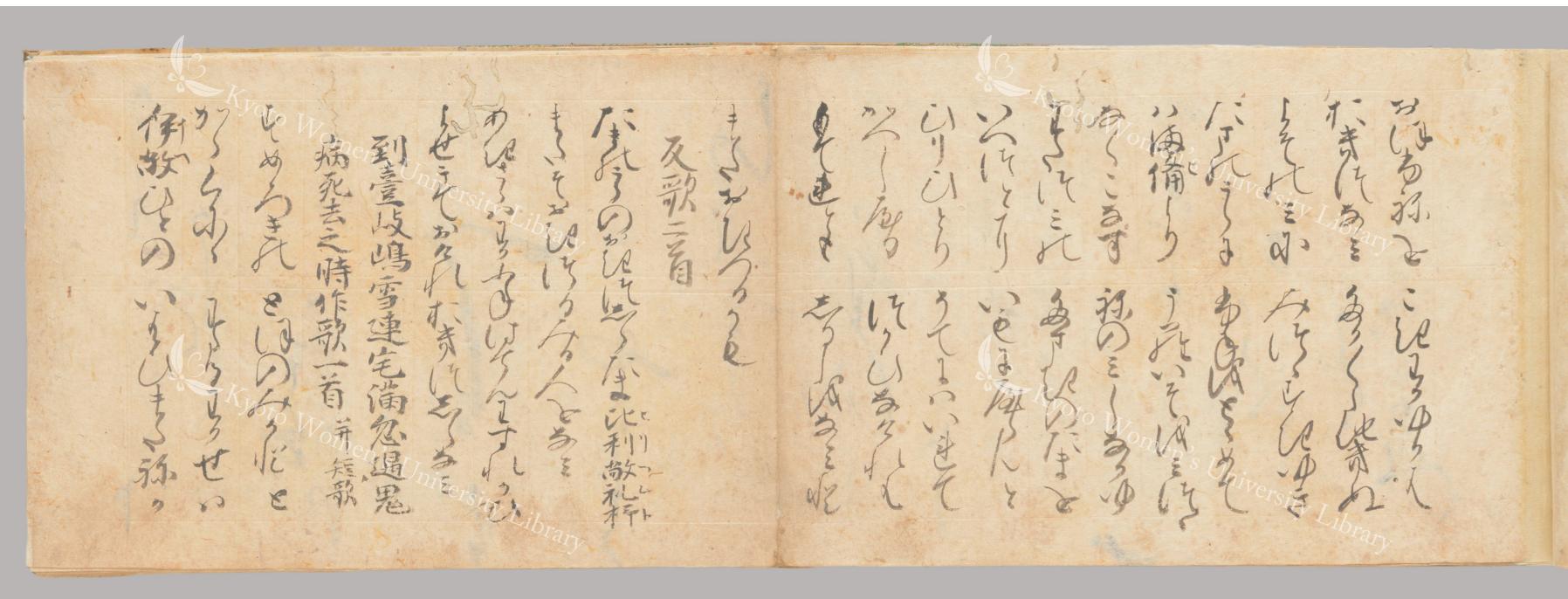
石井比奈夫博陰と妻歌

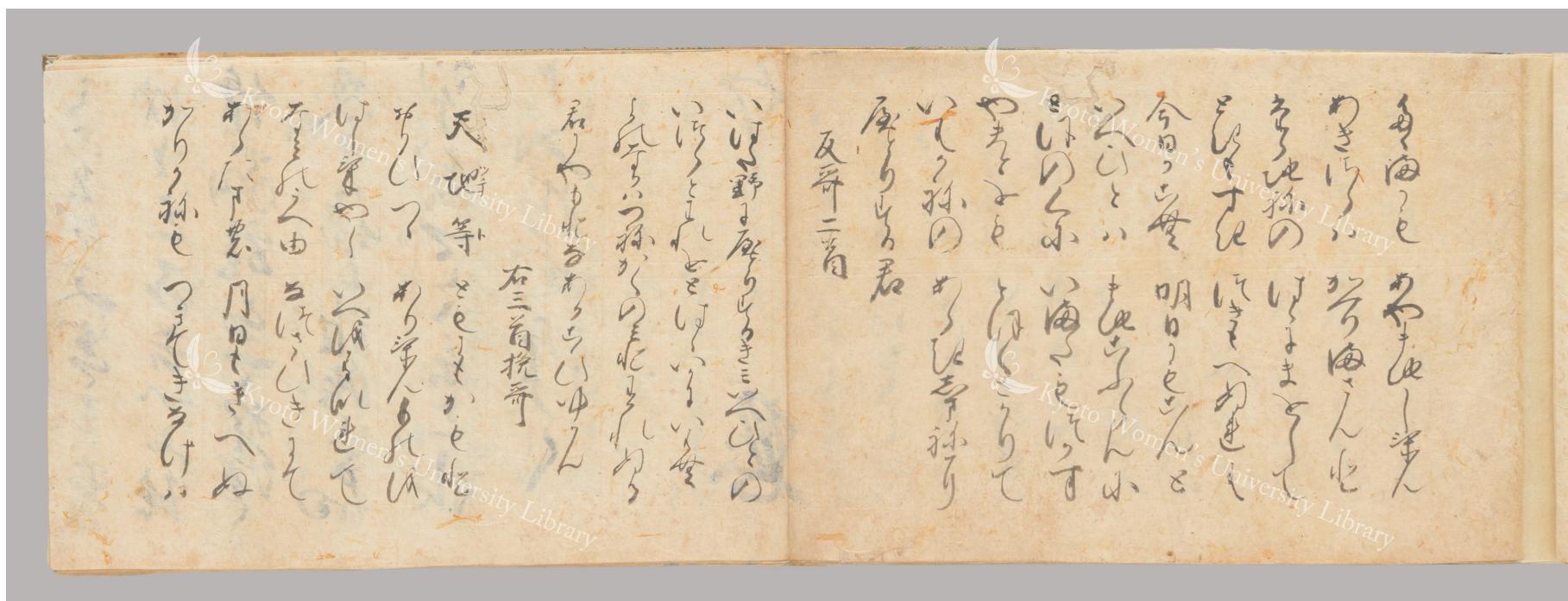
屬物詠思歌一首
yo yo
并註解

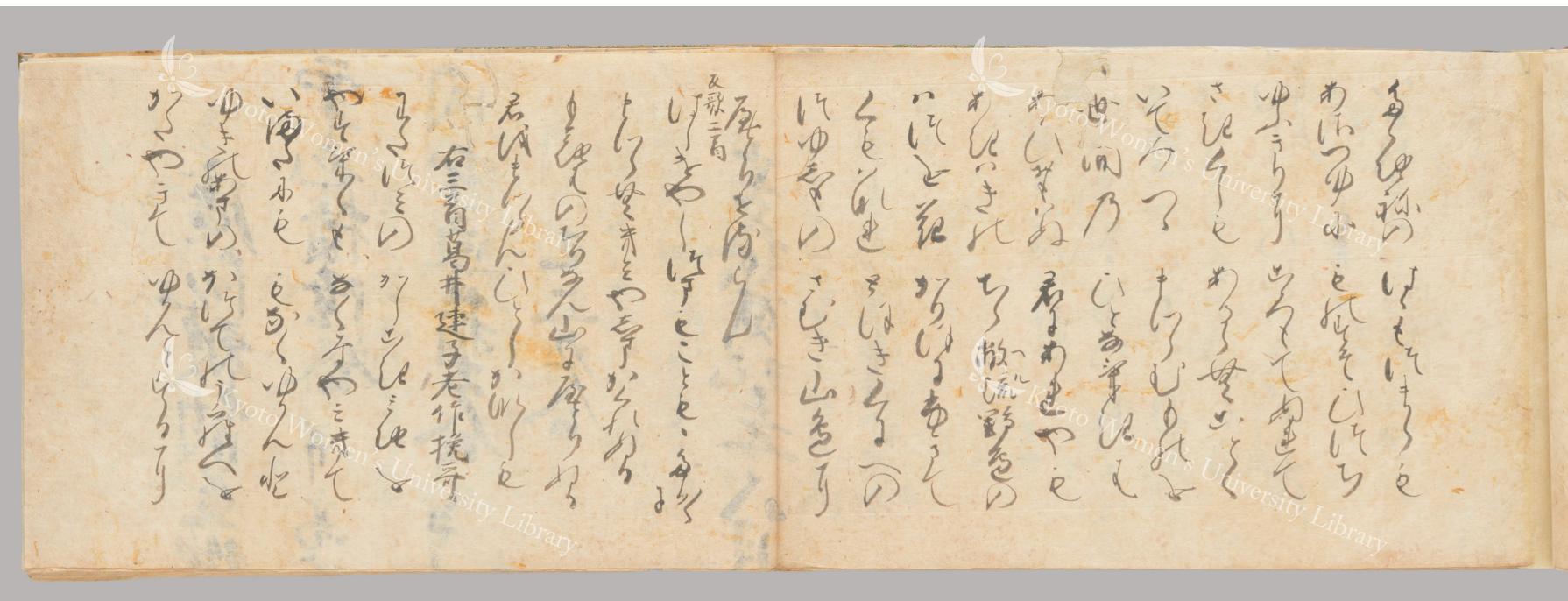
わざとくらべて、
うなづかしに、
うなづかしに、

三六一七









三六九四

三六九二

三六九三

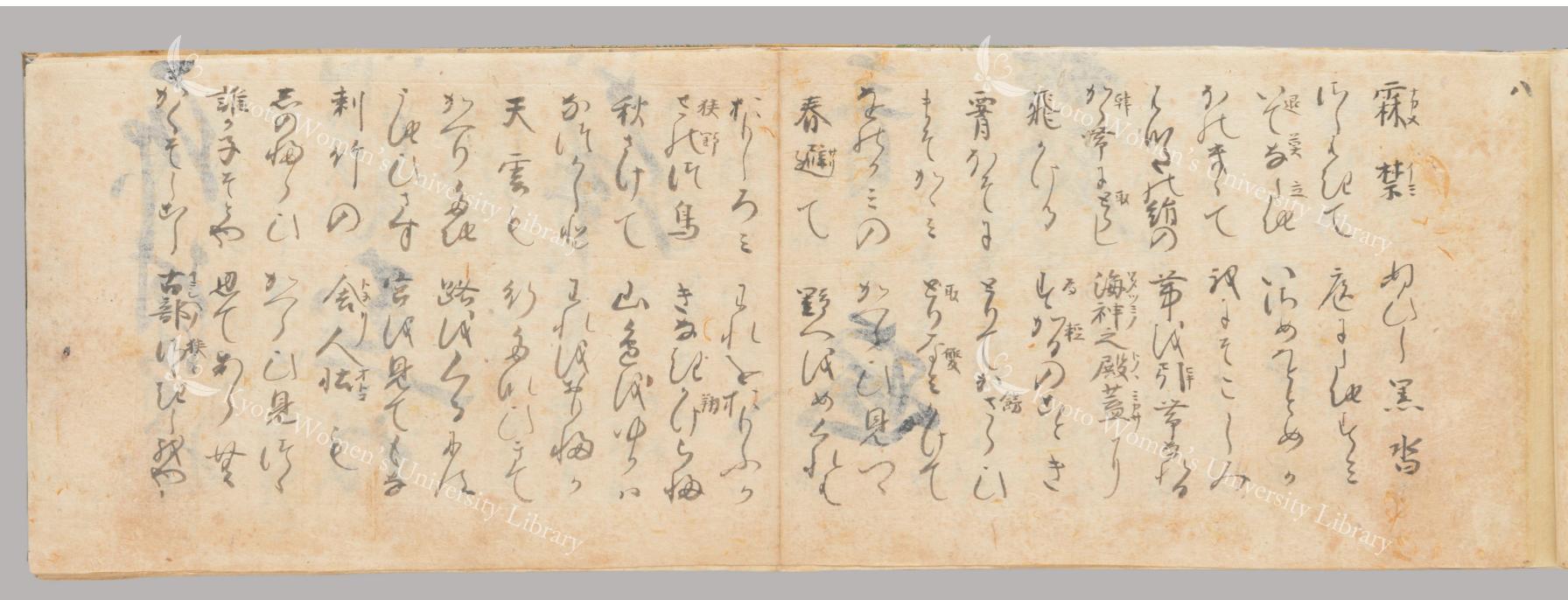
三六九五
三六九六

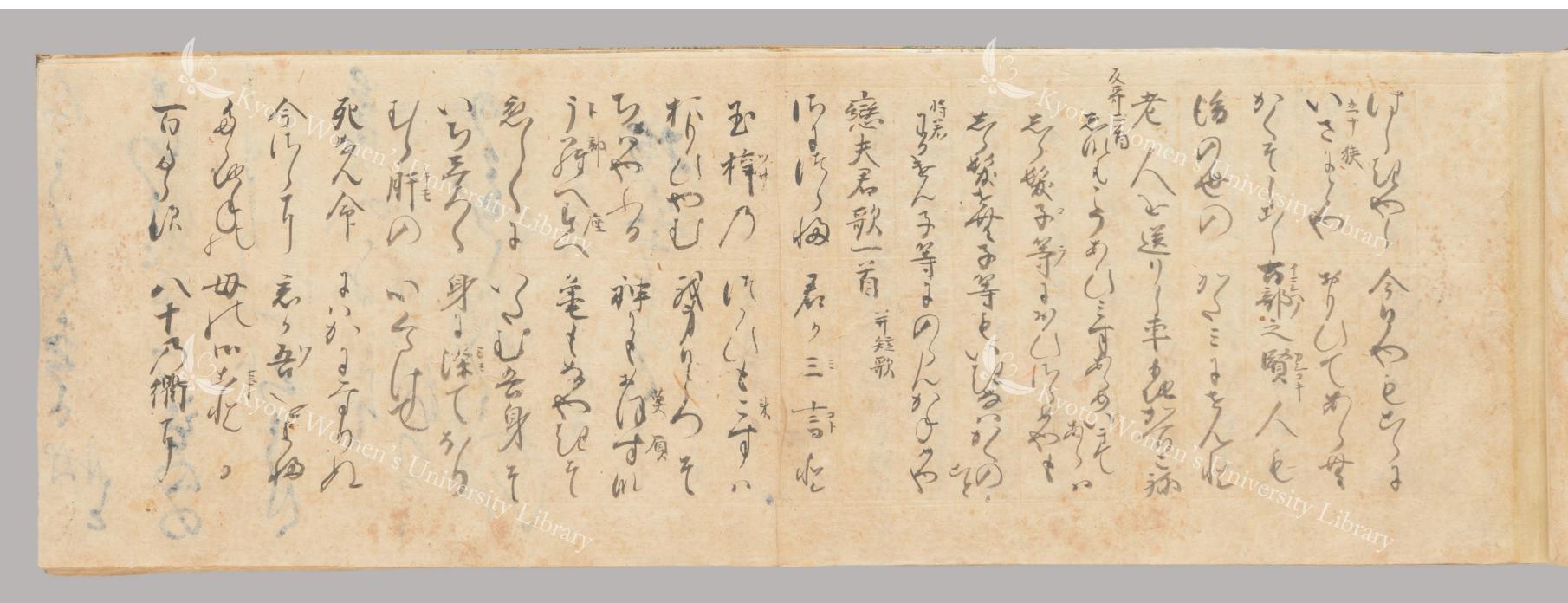
新羅寺へ以テアハム代
人色也。新羅寺
右三首六鶴作挽歌 Kyoto
Kyoto University Library

第十六

昔有老翁子同竹取翁也此翁秀
春之月登立遠望忽值黃蓋之九

箇葉也百燒無舊花客無止時
娘子等呼老翁咄咄叔父來乎吹
此燭火也於是翁曰唯
徐行著檜座上良久娘子等皆
共含笑相推讓之曰阿誰呼此翁哉
余乃竹取翁謝之曰非處之外偶逢
神仙迷惑之心無敢所禁追押之誰
希贖以歌即作歌一首并送歌
録子之名子故見 座





タ占トトノイを向

死乞人名歌

三八一二

下部古ハナレガミ占ミ

吉成のいと多時モ了す
お年久詩

三八一三

君さりてもかくちりゆ

Kyoto Women's University Library
石傳云特有娘子姓車持氏也其夫久逕
年序不作往来于時娘子後感傷流辭
病瘡瘦羸日異忽臨泉路於是遠使
喫其夫尾末而乃歎歎流涕口号斯歌
登時逝歿也

三八七五

琴酒ニテキサシ小野ニ

レバ水アマツクくいてと
寒水ヒヤミズの川をわたり
むじやうきだムジヤウキダきよ道よ

あしの鶴アシノツルとくにきよ通ト
カバカバ木カバいささかカバ
各室カブシめり珠ツブアラタツブ小笠コガシ
取アヒてもアヒ人物ヒトモノ
よきよじ道ヨキヨジマツよわいねヨイネ

能登國歌三百

三八七八

いづの
新羅
摘
能
酒

いづの
当鳴
一そ詠

石歌一首傳云或有愚人奔墮海底不
解鐵沉無聲浮水仰作此歌口吟夢喻也

三八七九

いづの
くぬき酒屋

三八八〇

いづの
机

石二首

いづの
机

いづの
机

いづの
机

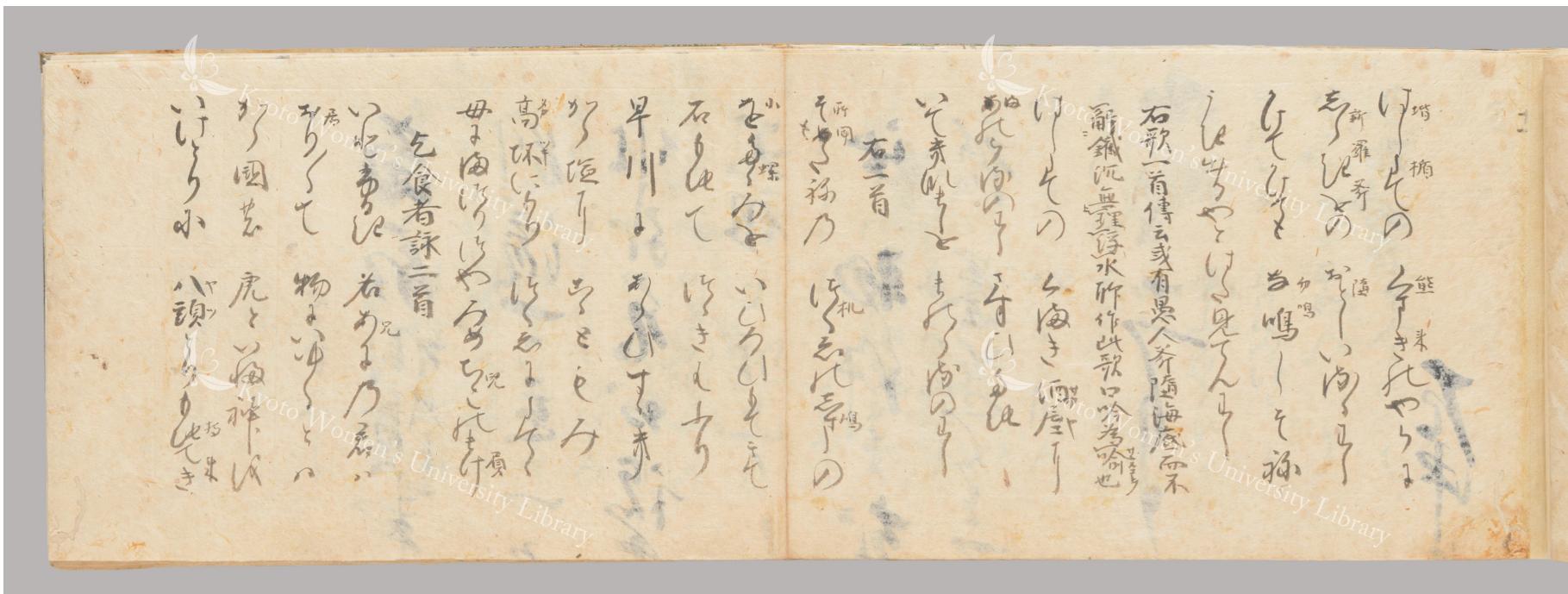
いづの
机

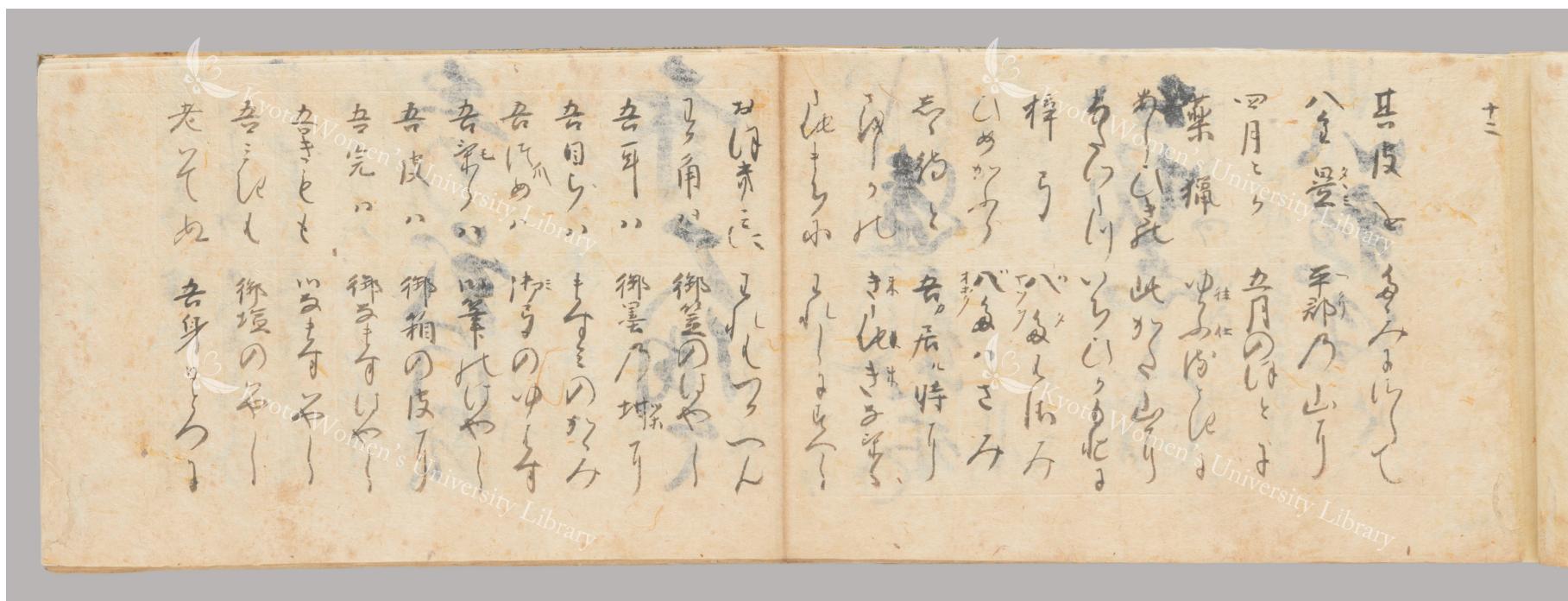
三八八五

いづの
机

いづの
机

いづの
机





七重紙
八重紙

卷之三

三八八六

右歌一首為鹿速彌作也。
すゑや 總販の小江
うけり りむりて
あつと おしきみゆすと
ぬきよ
正成年ノハ
あさる事ハ
歌人ト
笛子ト
笛子ト
琴ひきト
琴ひきト

おもむろに
立てり まほ

りゆうり 東中の門

御文庫
市立図書館

馬子
大通

牛子之
鼻綰以
金

Wome
じ ゃ せ

卷之五

お下さんより墨の
まいる新雄子春

庭立と確乎と春
うすや強ひの小にの
いづみを賣して
陶人暮 いづみ胚
今やそ 明日より
吾日より 塗り毛と
時賞毛

石歌一首為端延痛作之也

オ十七

讚三香原新都詩一首并短詩

三九〇七

山あらば まめあこむ
春され 祖奥じどり
秋せむ まめ葉よかし
すもせむ泉河アツカみどりくわす
室流橋ムロハシとくとく瀬よかは

橋とくわがふじくわ

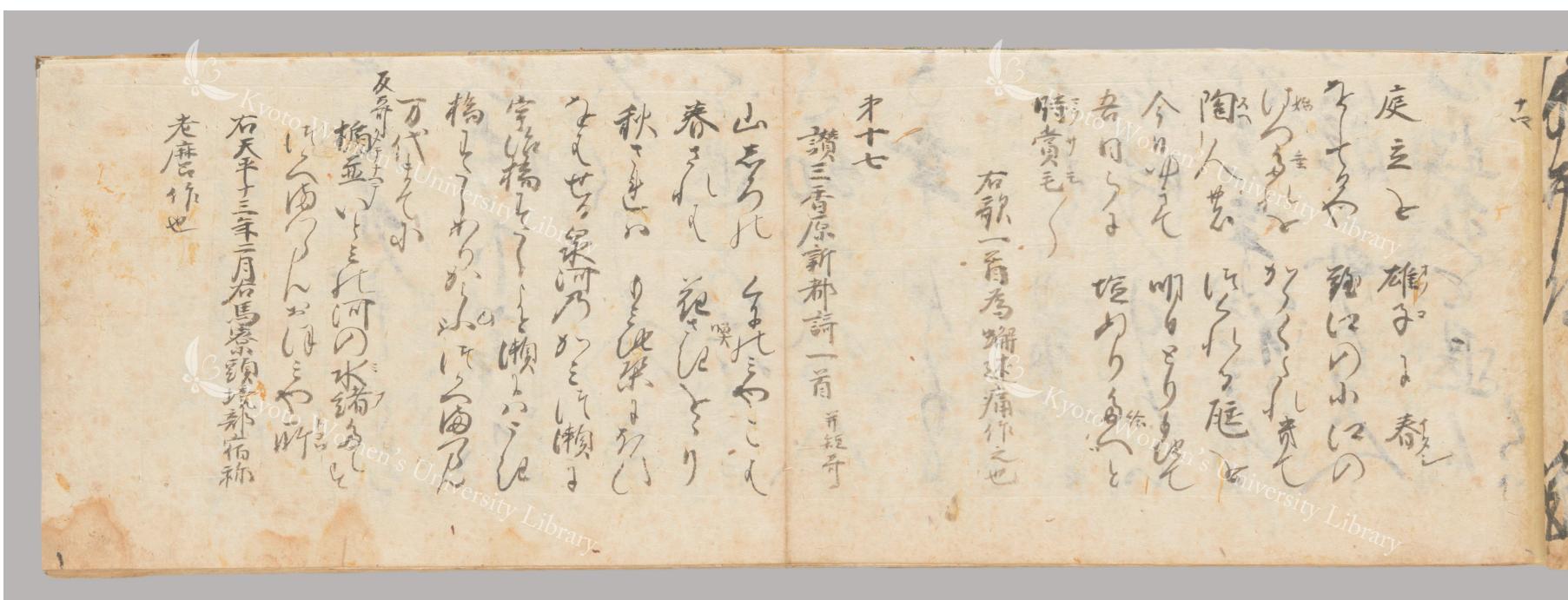
万代そく

反舟並み北河の水諸角と

Kyoto Women's University Library
Kyo
石天平十三年三月石馬崇頃新都宿詠

老唐作也

三九〇八



哀傷長歌之弟歌一首

并短歌

わすれひきはめよ

大王のましれす小

牛を

かみすすり山と木

鳥もめ玉井野時小

ねむれおれなりと

かくらうひのきひも

下ほとの通はみとは

山河の

うすてめしと

見まぢ

あきらめほのうし

よつて

みるかわ

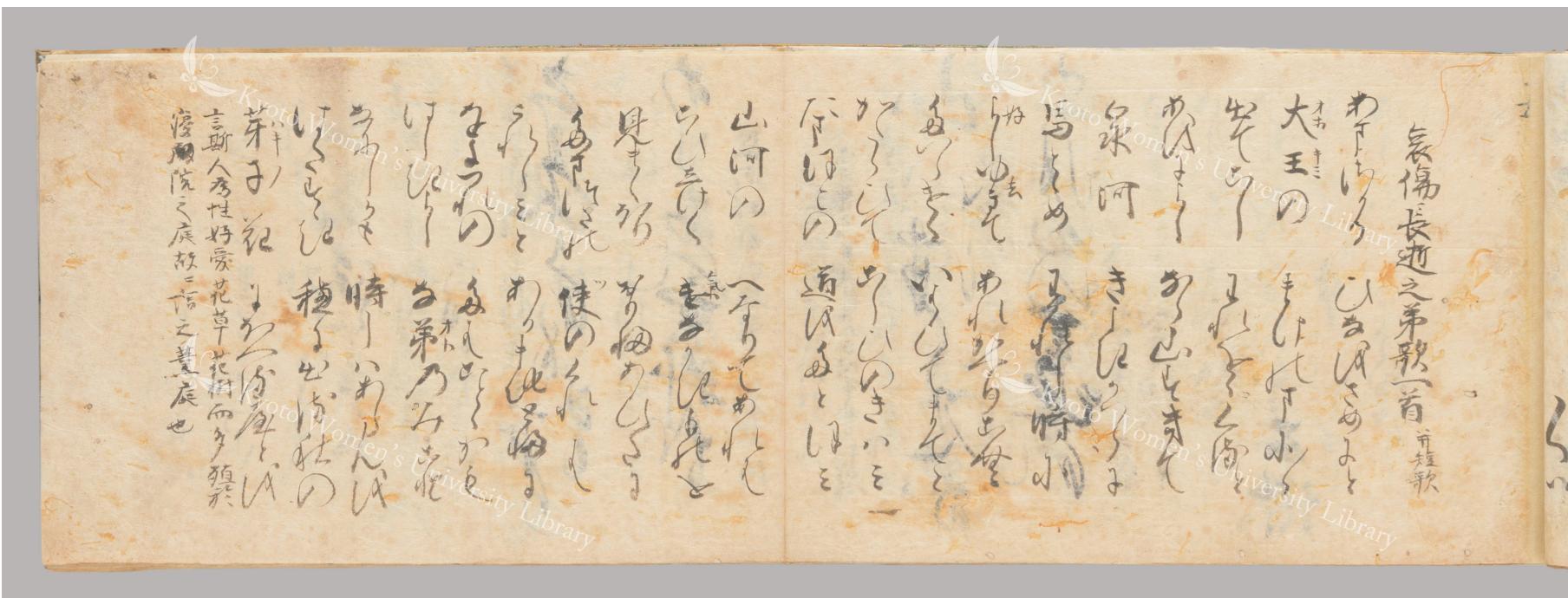
う弟のみ花

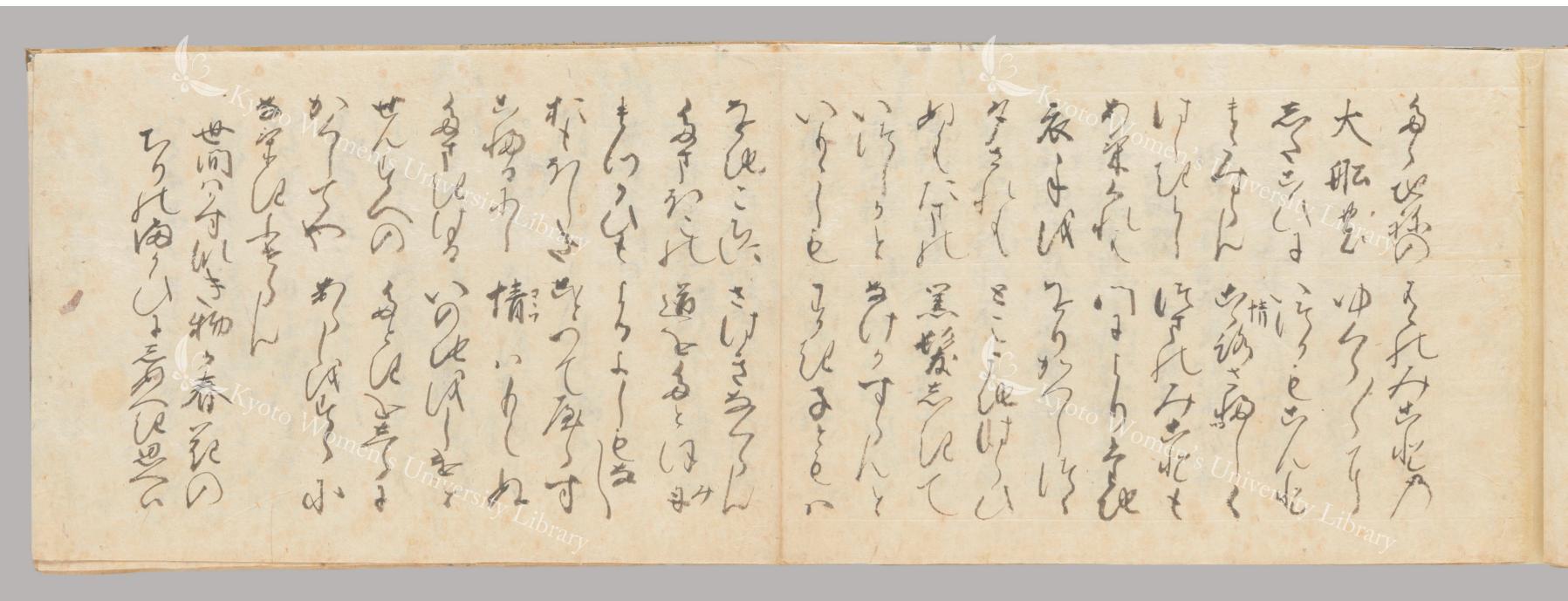
時一のめんば

いそじ種子出か枝の

言斯人有性好愛花草花樹而夕禦於宿院也

言之是也





三九六四

山河さんかもよしとよしとよし
いとひのれりやまし
右天平十九年春二月廿日趣
國守之館卧病逃傷聊作此歌

更贈歌一首一并短歌

Kyoto Women's University Library
報慰陋心載荷おもて未春無堪時

渝也但以雅特不涉遊藝之庭

樺翰カハシ之藻自乏乎形蟲冥幼年

未經山林之裁歌之趣詞失多

叢林ツクシ矣爰辱以藤續錦之言

更題拾石回覆之詠目是俗退

懷癖而能熟已猶持數種或取

嗟嘆其詞曰

おもてのよしとよしとよし

志すか隨スルカ少シはぬ小

身すますよしとよし

身のつねタガよしとよし

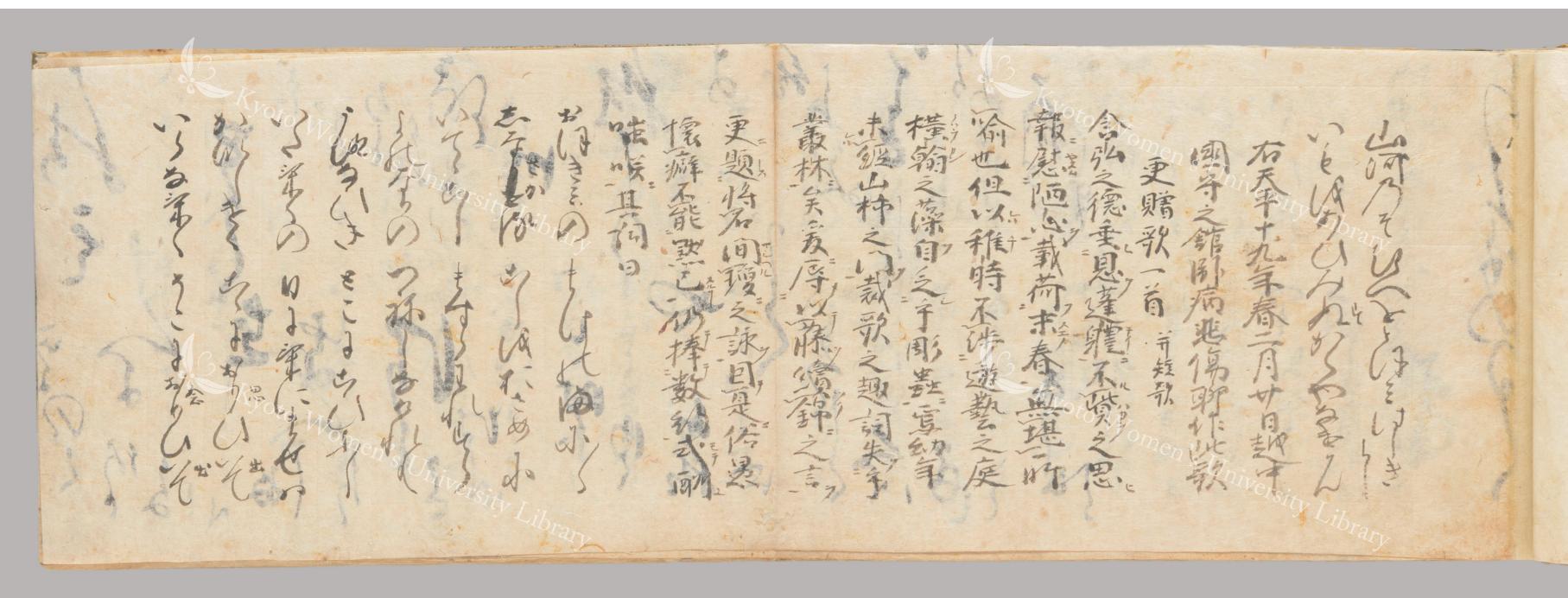
身のよしとよしとよし

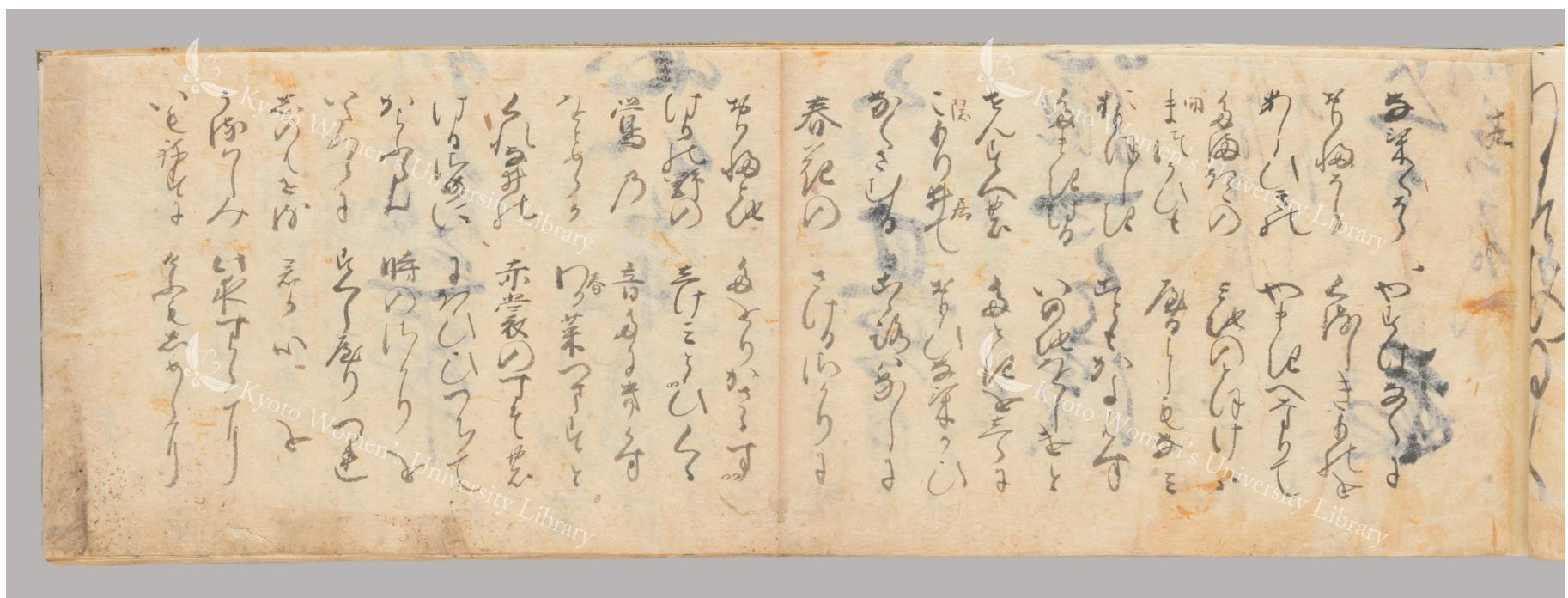
身のよしとよしとよし

身のよしとよしとよし

身のよしとよしとよし

三九六九





三九七〇

三九七一

三九七二

20
才

20
ウ

あしふてをあ

あらき山うるおーみへ
さくとてあしむと

摩うきはまうじとしと
あくにんあらうも

宵三日大伴宿称家持

七言晚春三日遊覽一首并序

七言晚春遊覽桃化照映以分

紅折色含芳蕊綠于時也拂手暖

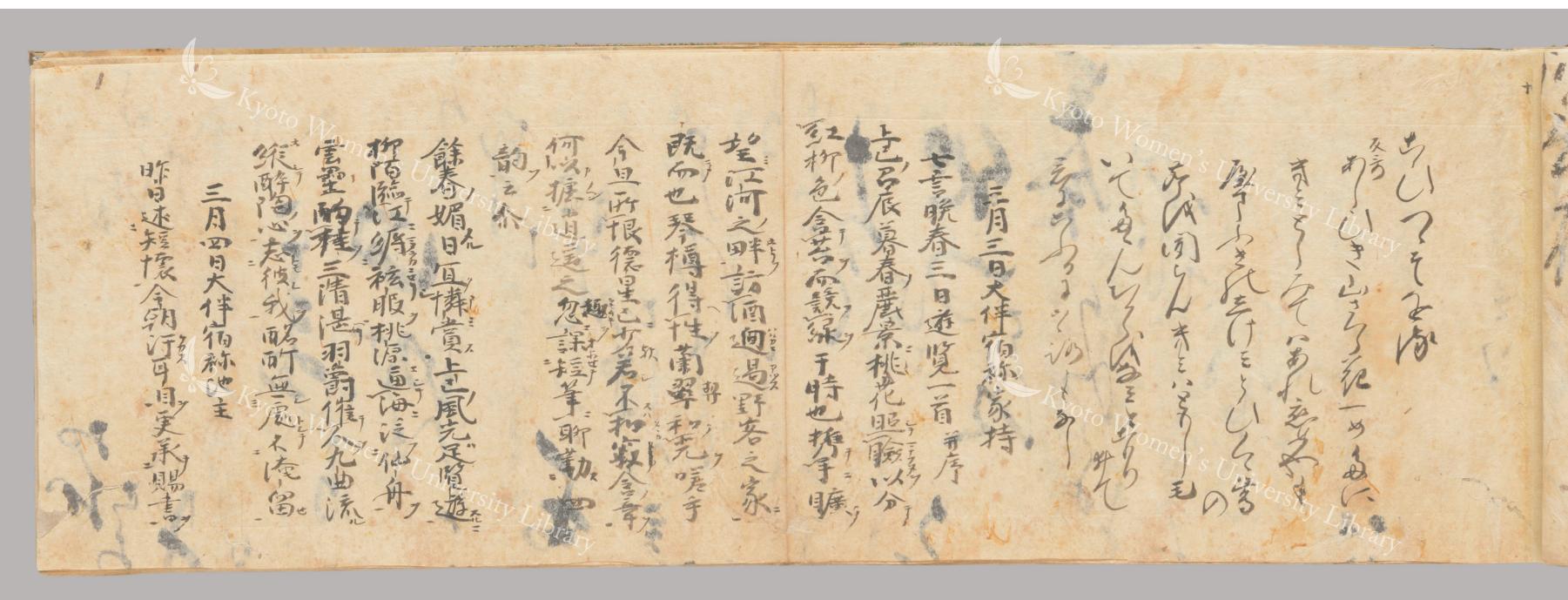
望江河之畔訪面過野客之家
既而也琴樽得性蘭翠和光暖手
今日所恨德星已方冕不和寡含章
何以懷音遠之忽諭未革聊勤

韵云亦

餘聲媚日宜拂賞古風先足覽遊
仰臨江鄉袞服桃源遍海泛仙舟
當壘的桂蕪漫羽翰惟人尤曲流
縱醉酒忘彼我酌酌無處不淹留

三月四日大伴宿称地主

昨日述短懷余朝行可見更承賜書

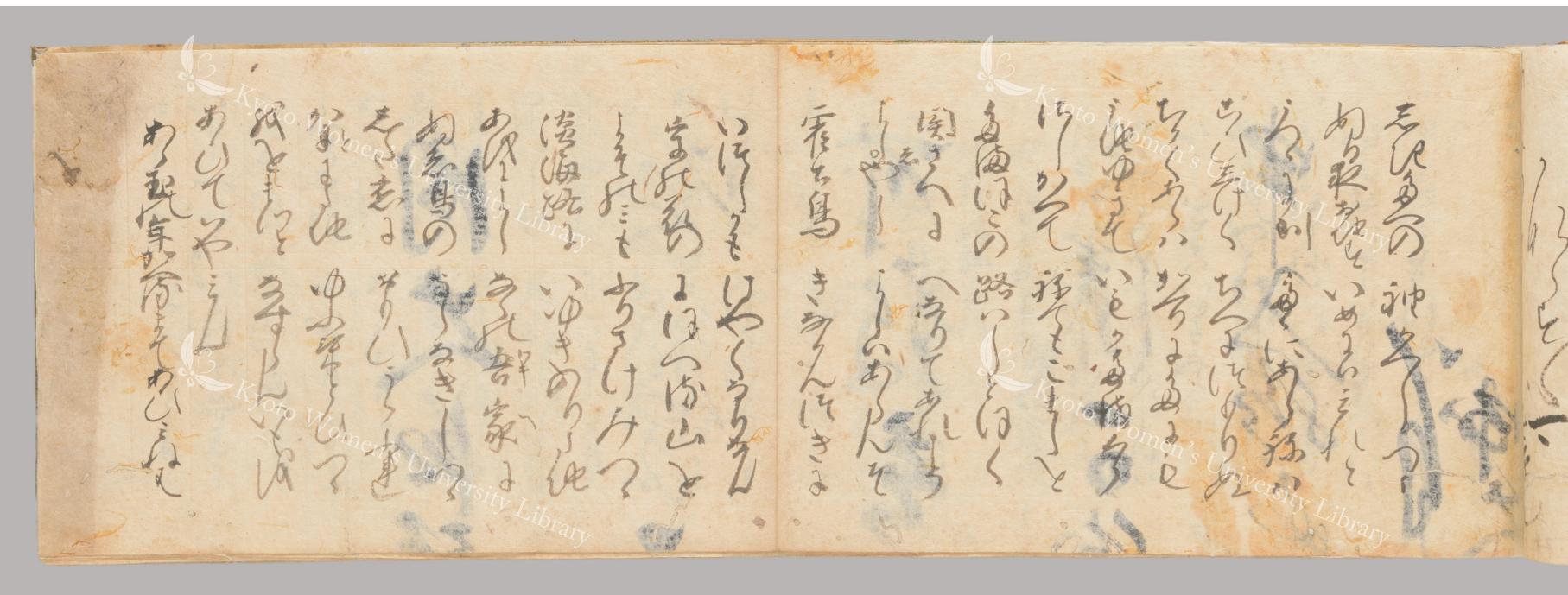


日奉不次死罪

不遺下賤，鎮更復言。英雲里氣，遠
調過人。智水仁山既靜，林鄉之名，清江
陸海自坐，詩書之廟宇，聽思非常，誠情
有理。七步成章，數篇滿紙，巧遣愁人。
一重美能除，衰者之積也。山林歌泉。
此如茂周龍筆，海峽超得看矣。

三九七三

おひきや西野こいは
わゆふ。じゆまとほり
すくとあきらめかね
あくよし。あせきかよ
まほれにしもと
さくに。いきにきぢ
そも。おまよよせ
浦のゆひつまく
れす。すまむれを
すまし。すまむれを
ひとのあよせく
そよ。いふく
そよ。いふく



三九八六

三九八七

三九九一

遊賈布勞水海賦一首
并短歌

此海者有泉水而蓋以木也

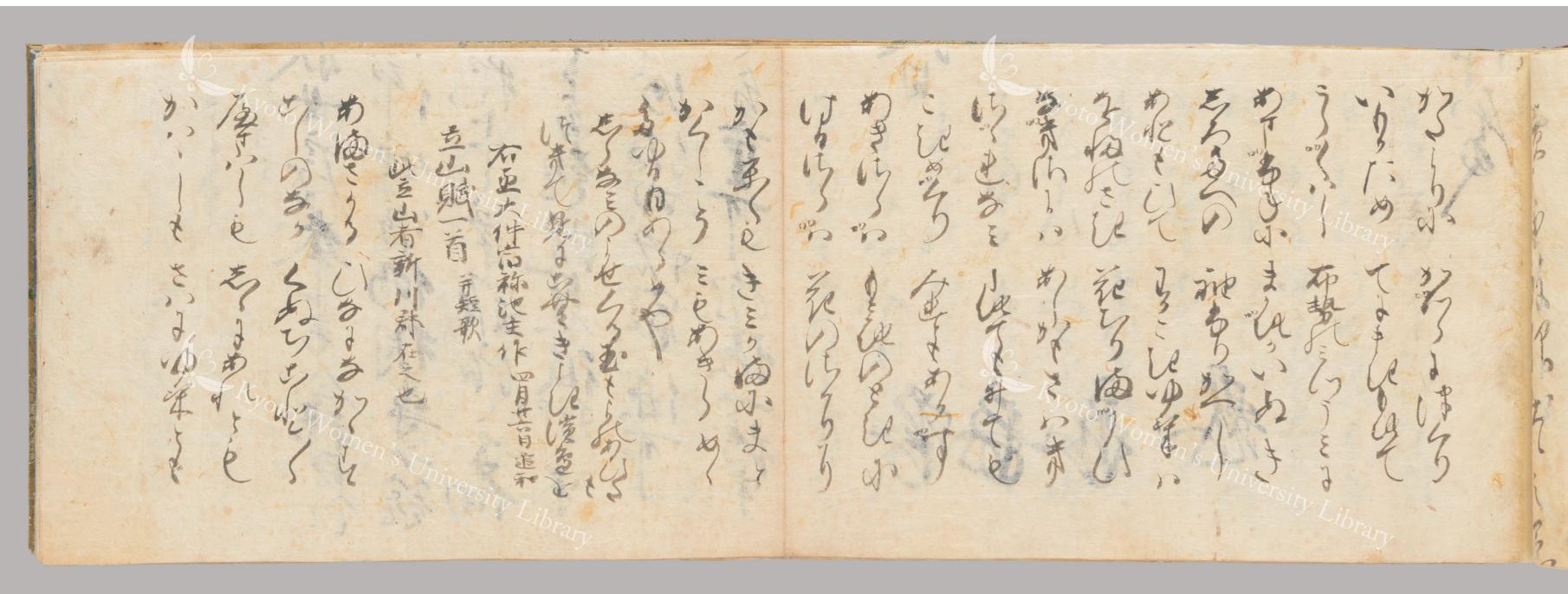
物のふるやうもの生れ
さへはくらへんしんじ
えぬきをそぞくにありて
そぞくハやうそくす
とぬよりに佐吉^{サキ}よりゆり
ちのぬきのうづまきして
うづまきせうづ

三九九二

三九九三

山中行也
いぬつせゆきし
ちかし小
若山行くもひ
あせのものまの見うす
やまとくも見うす
石守人伴宿称萬物水
歌和遊覽布勒水海頭一首并一绝

山中行也
いぬつせゆきし
ちかし小
若山行くもひ
あせのものまの見うす
やまとくも見うす
石守人伴宿称萬物水
歌和遊覽布勒水海頭一首并一绝



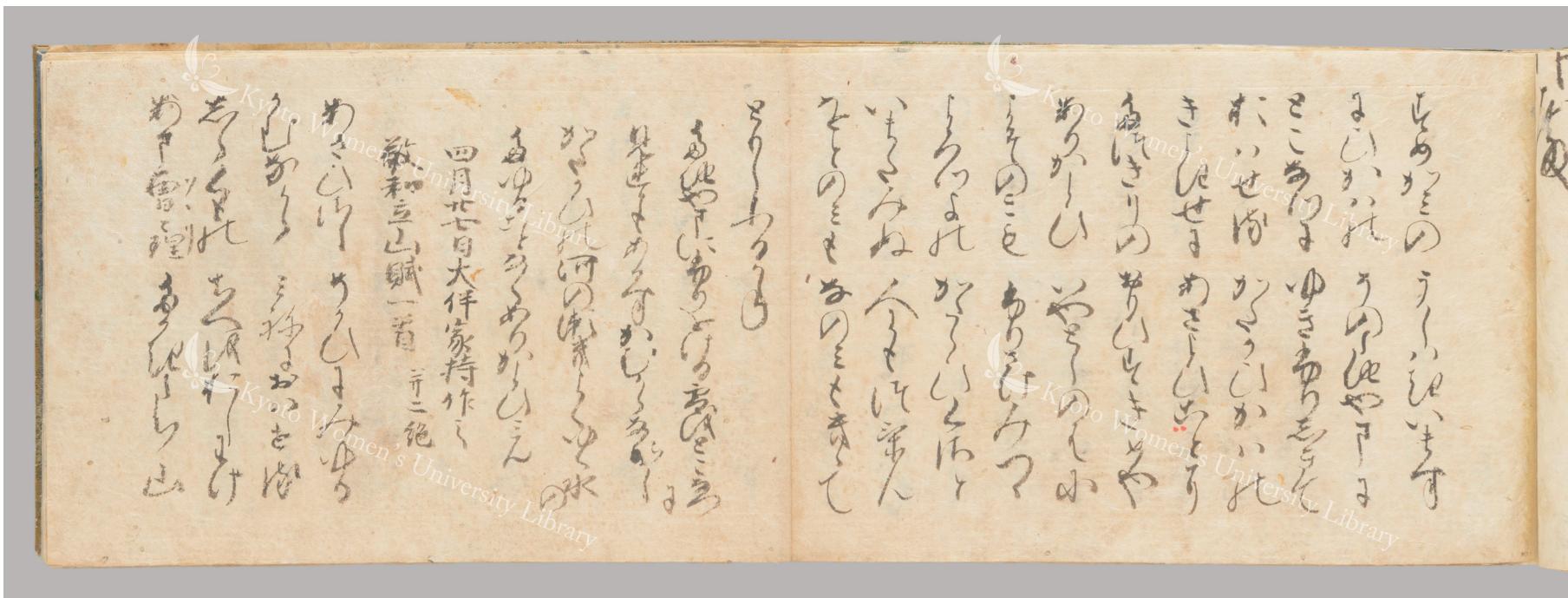
しめのうへひます
まじはれうへゆアヌ
とこすゆきあつもラ
れいせんかくしき
きじせすあそしめ
あらしやくのくわ
あきりのきじめまや
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ

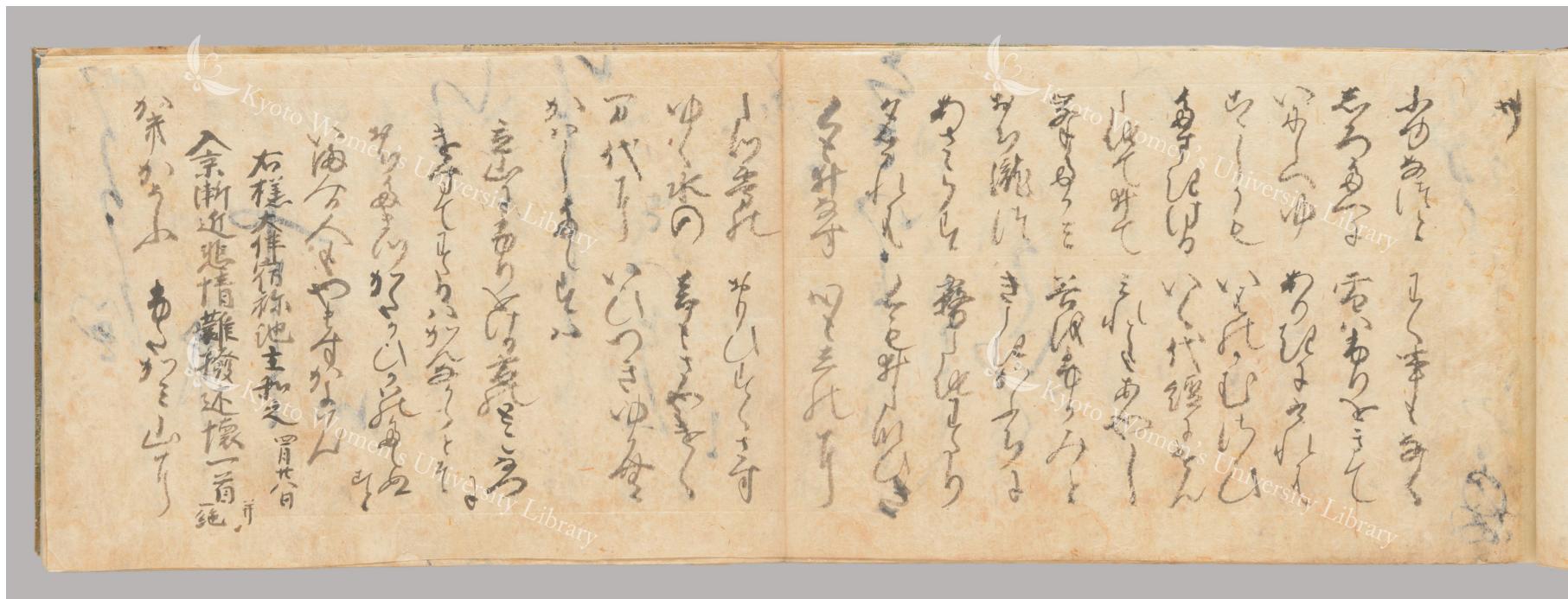
四〇〇一

四〇〇二

四〇〇三

あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ
あらしめくわ





一
文

30
才

京都女子大学
Kyoto Women's University Library

入はゆ
御の事に
ありて
わうねひと
せうきと
とすよは
かくのう
むくし
きこひあ
玉杵の通ひ
の書れ
氣の爲に
うそ

ゆきす、よみぐれく
よひすとて、わざーと
わざーと、わゆんに

四〇〇七

Kyoto Women's University Library
ヨセヒタハシモジルシロ
ヨシモトハシモジルシロ
大伴宿禰家持贈惠達御承望
四月廿日

四〇〇八

忽入見京述懷之作生到悲苦断
隔々迴愁緒難禁取奉所レニ一百絕
もやうく、あづまきもくせ
ゆふる、じゆくもくせ
つゝせよ、見ゆよと
さし厚、さとわくよ
せしきもの、さとわくよ
手すとせ、さとわくよ
口至のちあらはる
りうれゆまわらはる
旅するりえうじん
ちゆうじゆまじん
まちくととくわく

山高水長

見しをへまれれ山河
郭云

神の國すあらゆ
朝帝の

御天子すかくす
京都 University Library

わき西河す心の下く
Kyoto Women's University Library

いあくきみとよと
Kyoto Women's University Library

ゆくとくちゆとく
Kyoto Women's University Library

はくとくとくとく
Kyoto Women's University Library

さくとくとくとく
Kyoto Women's University Library

うひとくとくとく
Kyoto Women's University Library

四〇〇九

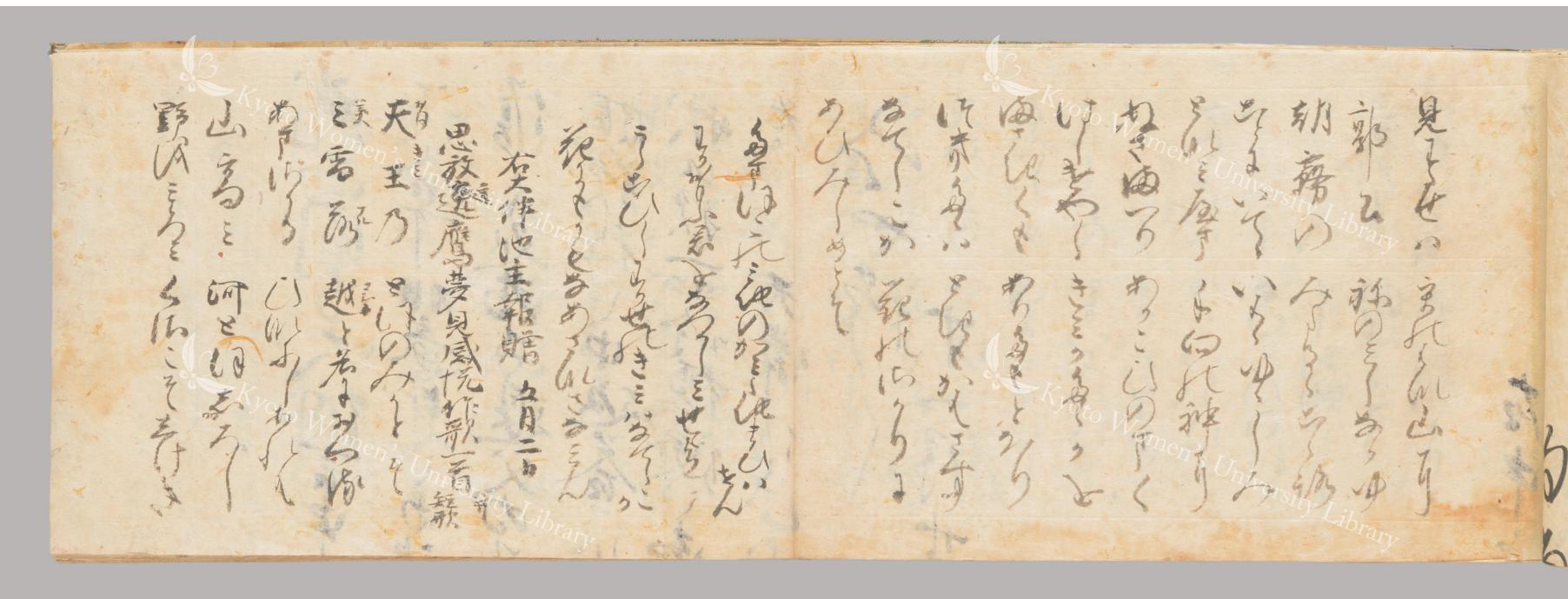
四〇一〇

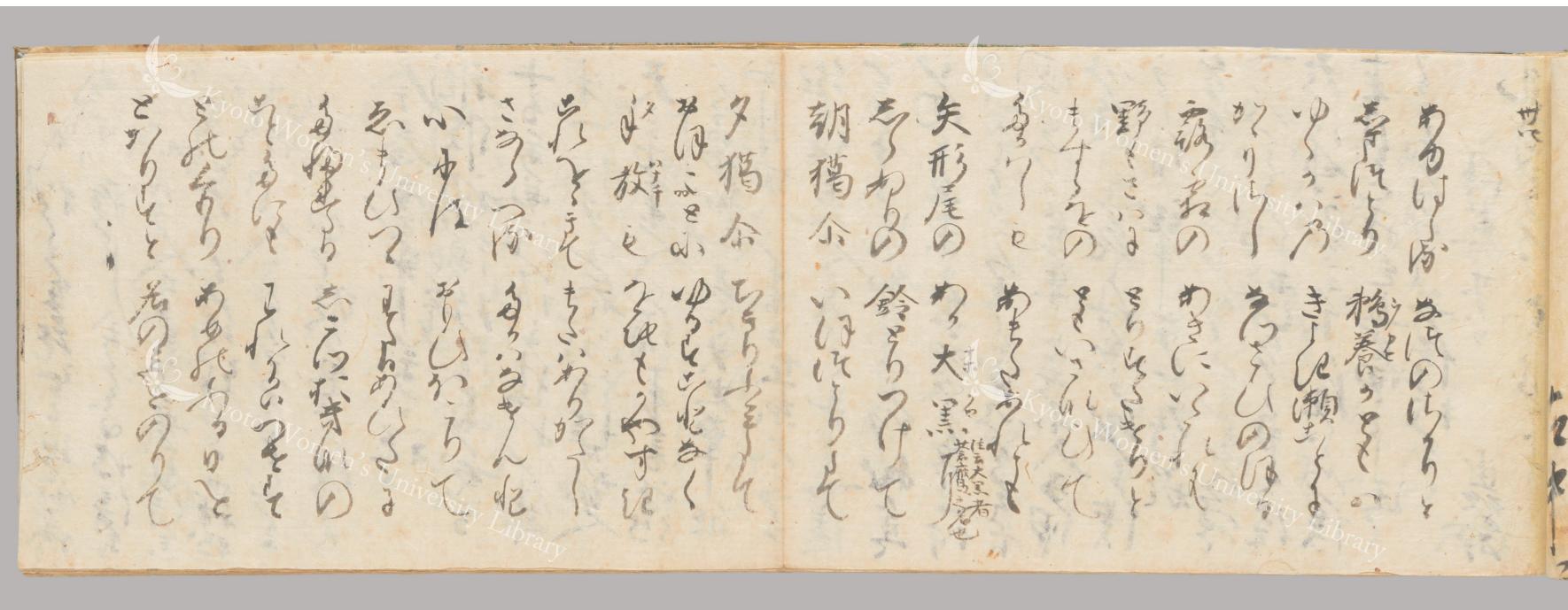
四〇一一

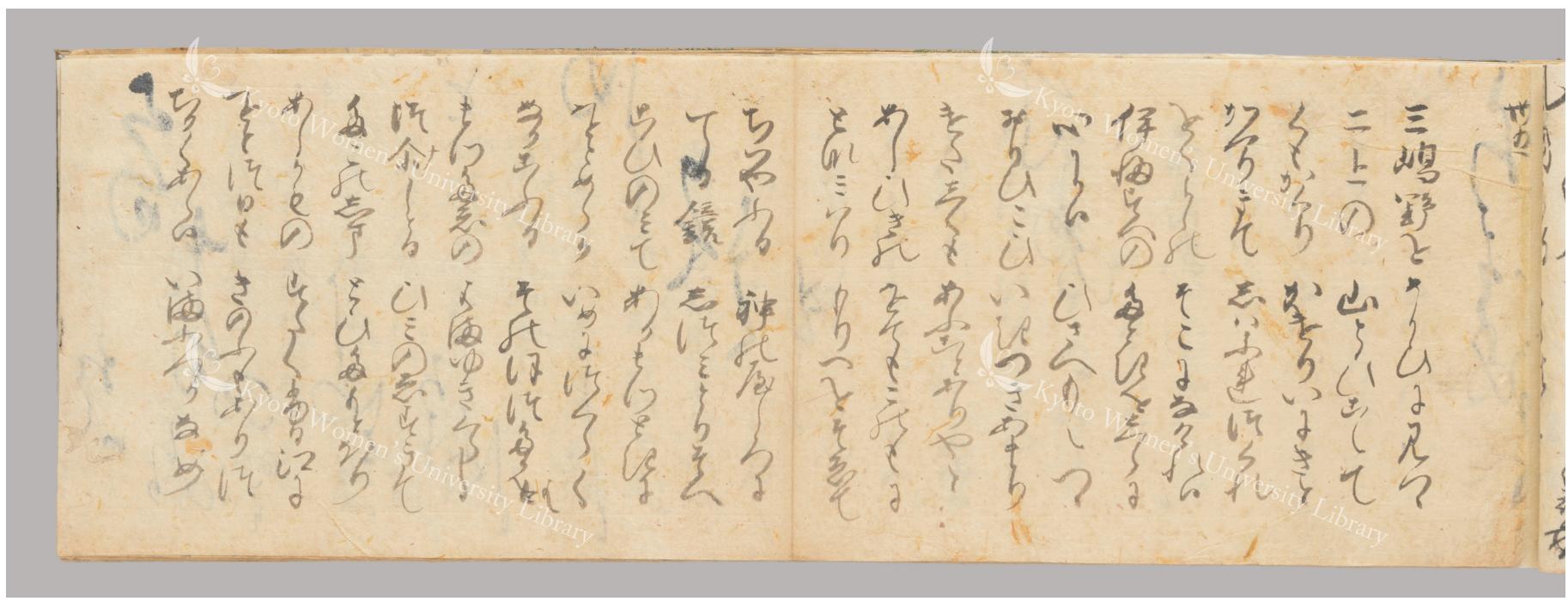
舞はれ元氣の舞はれ山河
Kyoto Women's University Library

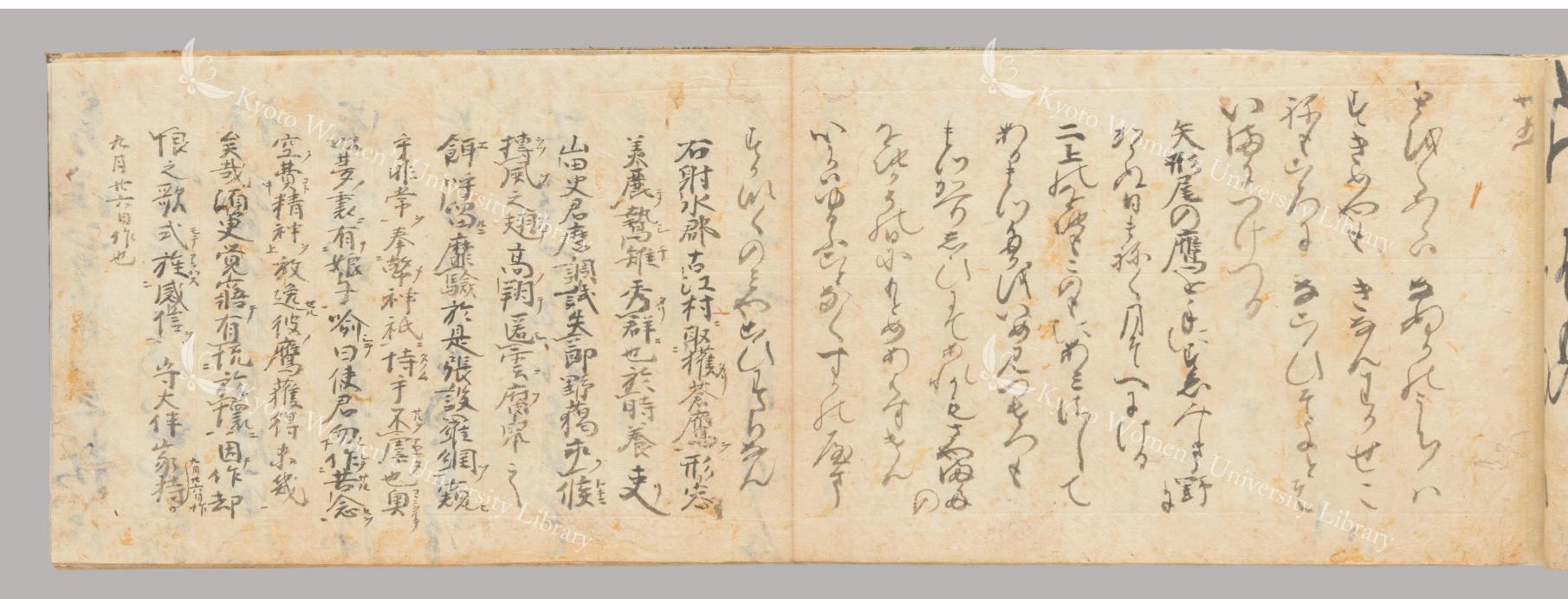
はくとくとくとくとくとく
Kyoto Women's University Library

うひとくとくとくとくとく
Kyoto Women's University Library









四〇一五

四〇一四

四〇一三

四〇一二

矢形尾の鷹とよし鳥子野
うみの月をかく月をへよけ
二上ねゆきこりやあまのく
わらじあはるみとくもつ
もひうらじいともりとくゆの
くねうれふりうわすきん
べふゆふくとくすれゆす

石附水郡古江村取獲答鷹形答
美廣鷹舞秀祥也於時養丈
山田史君度調試失郎野鷹立候
搏風之趙高翔遙雲窟卑之
餌呼鷹虛驗於是張設罿網覬
辛非常奉幹神祇持手不虚也與
夢裏有娘子喻曰使君勿作苦念
空費精神放逸彼鷹之獲得未幾
矣哉頃更覺寤有疏故還因作却
恨之歌式旌威信守大伴家持

九月廿六日作也

第十八

四〇八九

獨居屋裏遙聞雀篤喧作歌
高御座 もよだりほき
しゆきの望みんまの
キヨウ等くよはまほ

Kyoto Women's University Library
百鳥の來たてうき
春うききのれいも

うきとくもとをさん
宇の花のそ月とし

せうく きくわくす

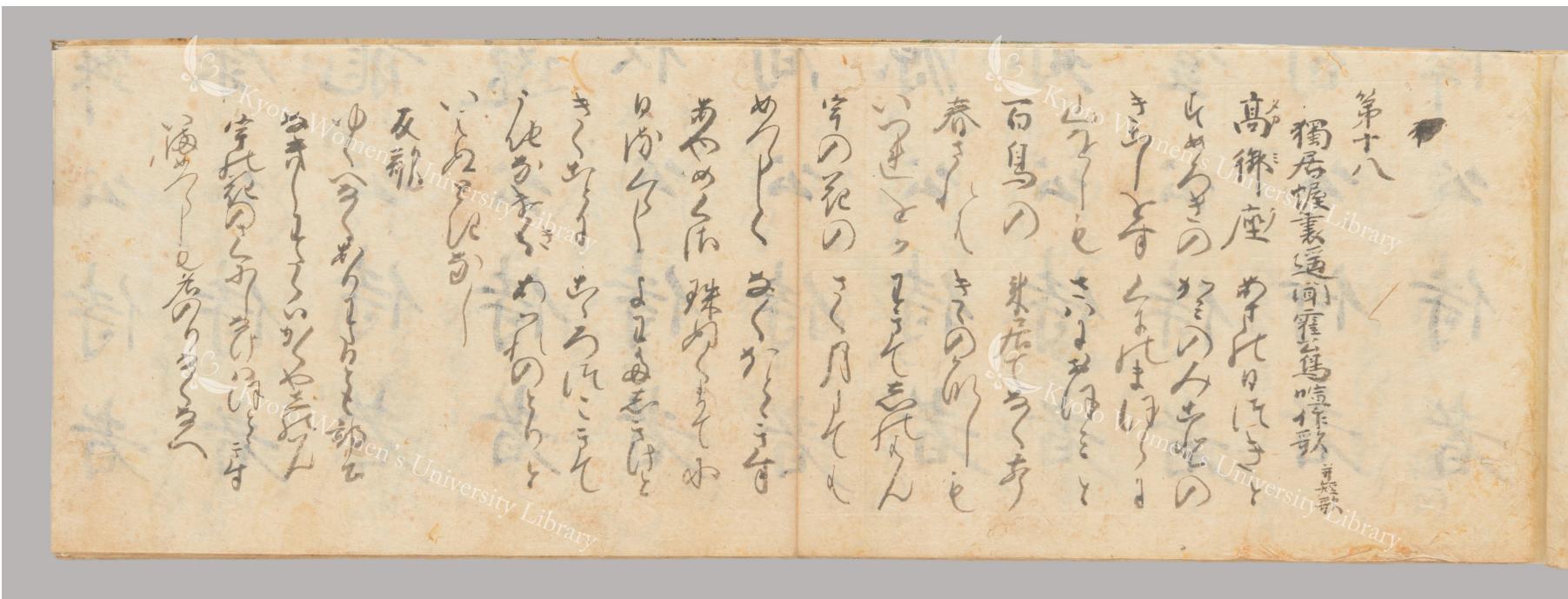
あめの底殊れともか
りかくよよめを

きくわくよ あうにこそ
化かくもあらのむと

京大圖書館
Kyoto University Library

四〇九〇

四〇九一



さくすとゆきの樹の
しゆよさむどり
臺灣十日家作し

賀陸奥國出金 詔書詩

おけのしほの國を
アトリモリモニメレ
トカミテ神^{シマツノ}の
御代^{ミタケ}天のサ詞也
アシキミテ御代^{ミタケ}
ミハセ^{ミハセ}安國也
山河^{ヤマガ}ひつももと

トモテ御調寶^{ミタケ}し

カクヒ^{カクヒ}ヒテモツ
モテモ各大王乃

りんと詔^{ミタケ}しゆま

事^{ミタケ}とけのほして

くの御^{ミタケ}と分^{ミタケ}も

お^{ミタケ}て

鶴^{ミタケ}鳴^{ミタケ}東^{ミタケ}國^{ミタケ}乃^{ミタケ}

金^{ミタケ}も^{ミタケ}と^{ミタケ}は^{ミタケ}れ

1

天地の神ミツコトノミコト

御祖の御靈れりて

卷之三

御食國

Wom
Wom

宇佐の雄

もろの
し事あらゆ

老人也。女童兒也。

無事之日
陽氣之時

卷之三

卷之三

大半の
毒氣彈頭の

其名ト
大業日主也

卷之三

海行
University
1875
Univer

草山風

の筆の
めりあ
サ

大夫乃
まへ
Kyo

39
才

39
才

まことのものとす
大伴と佐伯の氏も
人の御のうる辞として
人のまゝ御の名不總
大君よまじふ物を
じむきぬのひをも
梓らひよとくとて
鍔大刀ひよとくとて
あゆりゆのまりりよ
大王のまゆのゆり
よしそれもまくわく
そやしもひしゆく
大皇のゆきのゆく
きけい貴ゆきのゆく
及歌三百
大矣のゆきのゆく
ミシのじよきのゆく
奈のゆきのゆく
吉くもとゆく
よしきのゆきのゆく
えのゆく

四〇九八

國守館大伴宿禰家持作
為幸行苦野離宮之時備作歌
一首 并短歌

あひなす おれ日嗣
天下 そしや
もろきの ひめのくの
けくとく けみほしき
まくまく せらまく
みのり あはくわ
ありがい さくはく
りむねの でくのむ

天嗣

みのりの君よく

大伴王

まほのまほ

此河の

まほのまほ

此山の

まほのまほ

也

まほ

すすす

まほ

四一〇〇

為贈家寶真珠歌首 義景

珠御の爲此 落葉にかゝるよ

いよりLibrary ほきうわくのね

わらひ乍 いはりとかとね

りりし ほれまとの

しのの ふくらむしゆ

おもひの 本居宣長

おもひくも まともうと

おもひ月日よミツ

右五月高日大伴宿祢家持依興作

教諭史生尾張少咋歌一首 并短歌

七出例云

但犯一條即令出之無七出輒弃者百

徒三年半不至云

雖犯七出不令弃之遣者杖百

唯犯財病疾得弃之

西毒例云

有妻更娶者徒三年女家杖一下

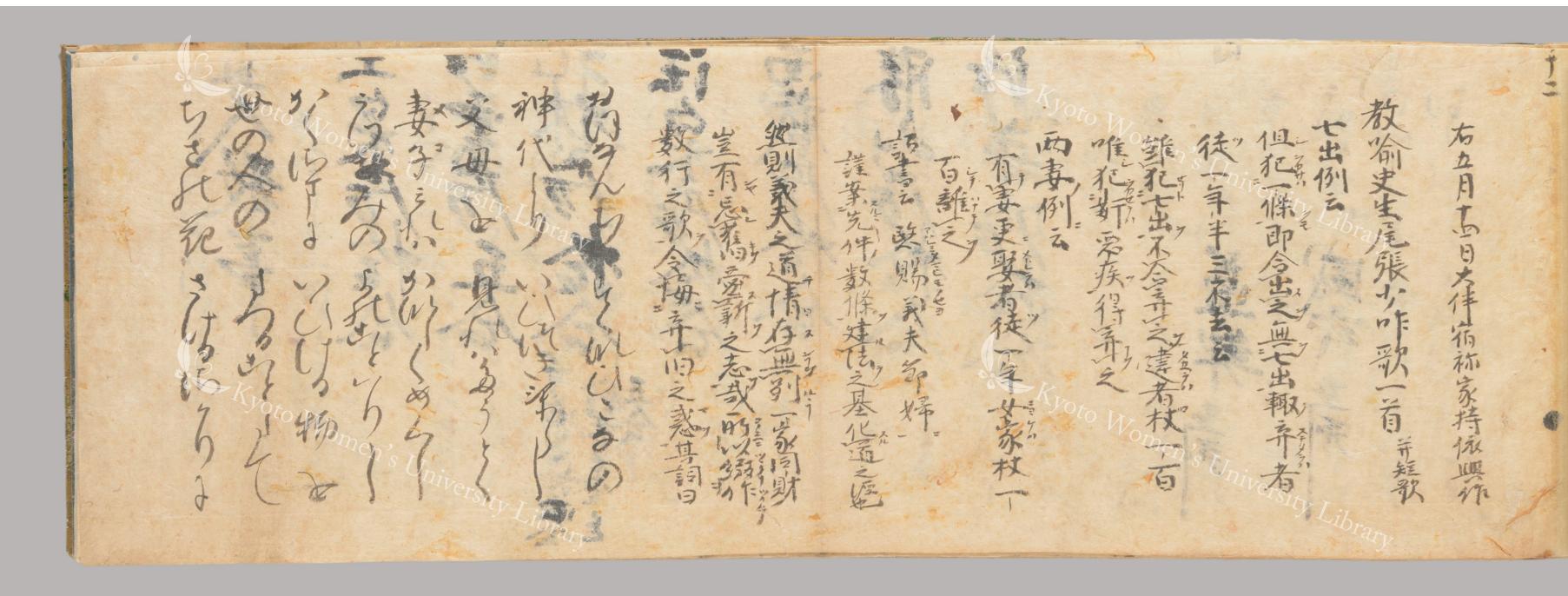
百雖之

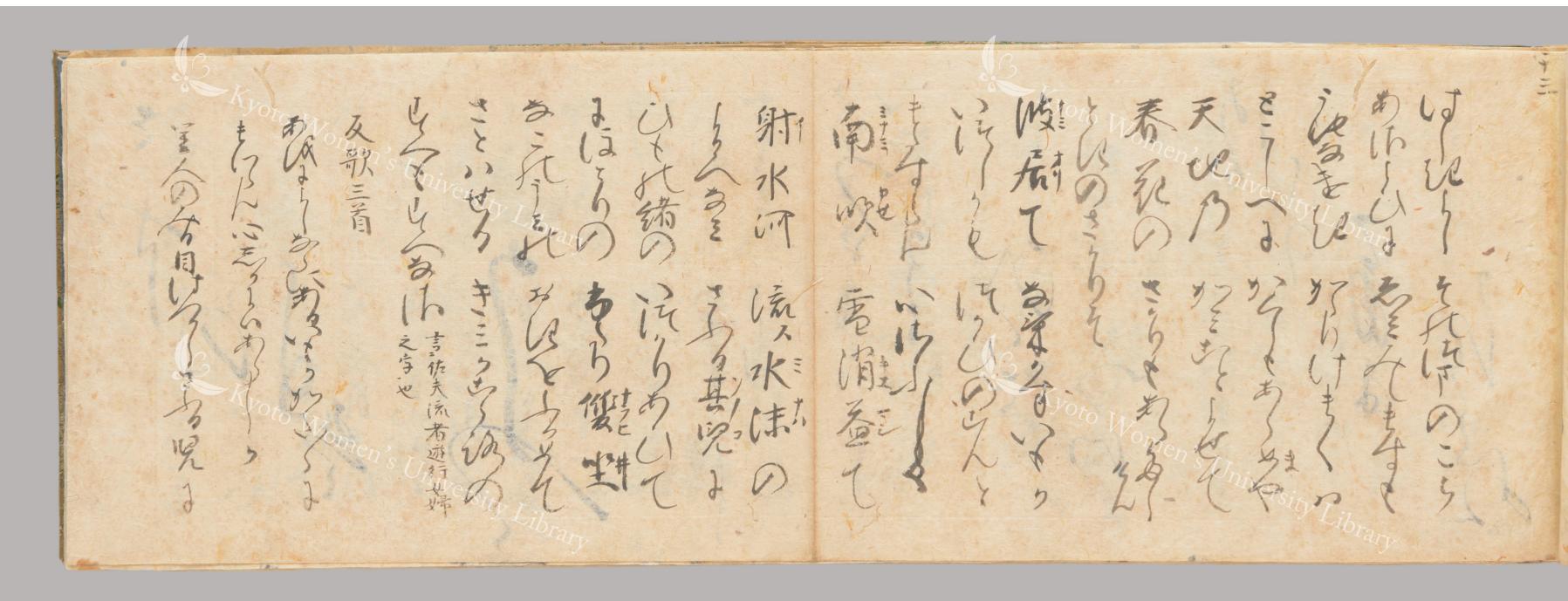
詔書云 贈賜我夫節婦

謹某先件數條建德之基化道之區

總則觀夫之道情存無別一男獨財

豈有忘舊愛新之志哉所以猶作
數行之歌念母章因之憲其詞曰





四一〇九

行ひき三ツニあてまづち
御はうふ物をほりとみの
えりあまなみあらむ

五月十五日家作

四一〇

先妻不持夫君之嘆使自采

時作歌一首

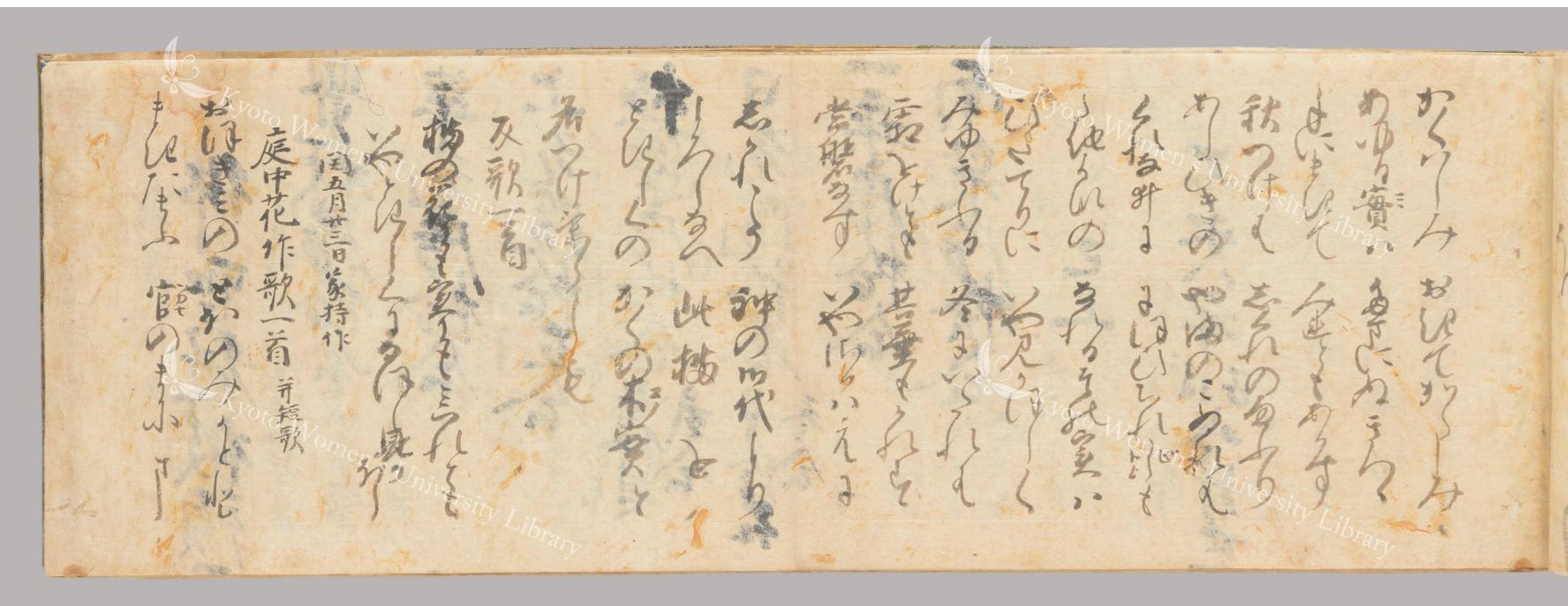
同月十七日家作

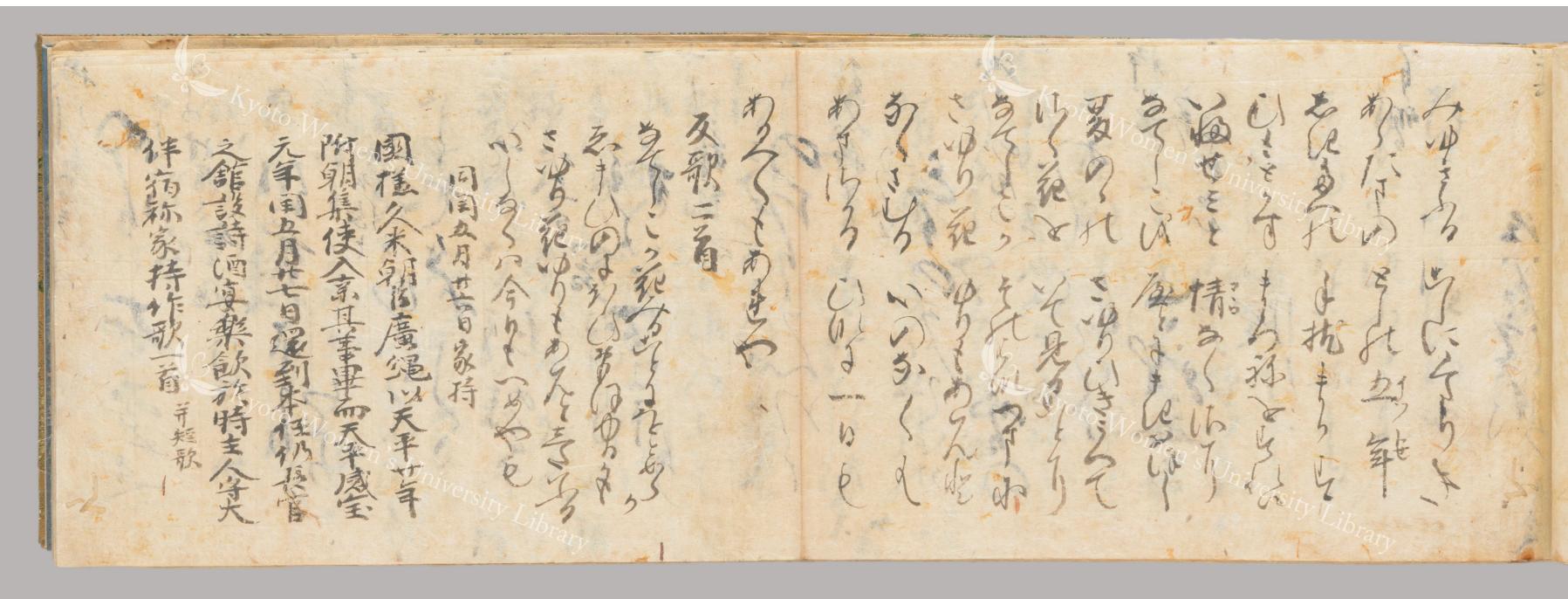
稿詩一首 并短歌

ひくも もよ! う

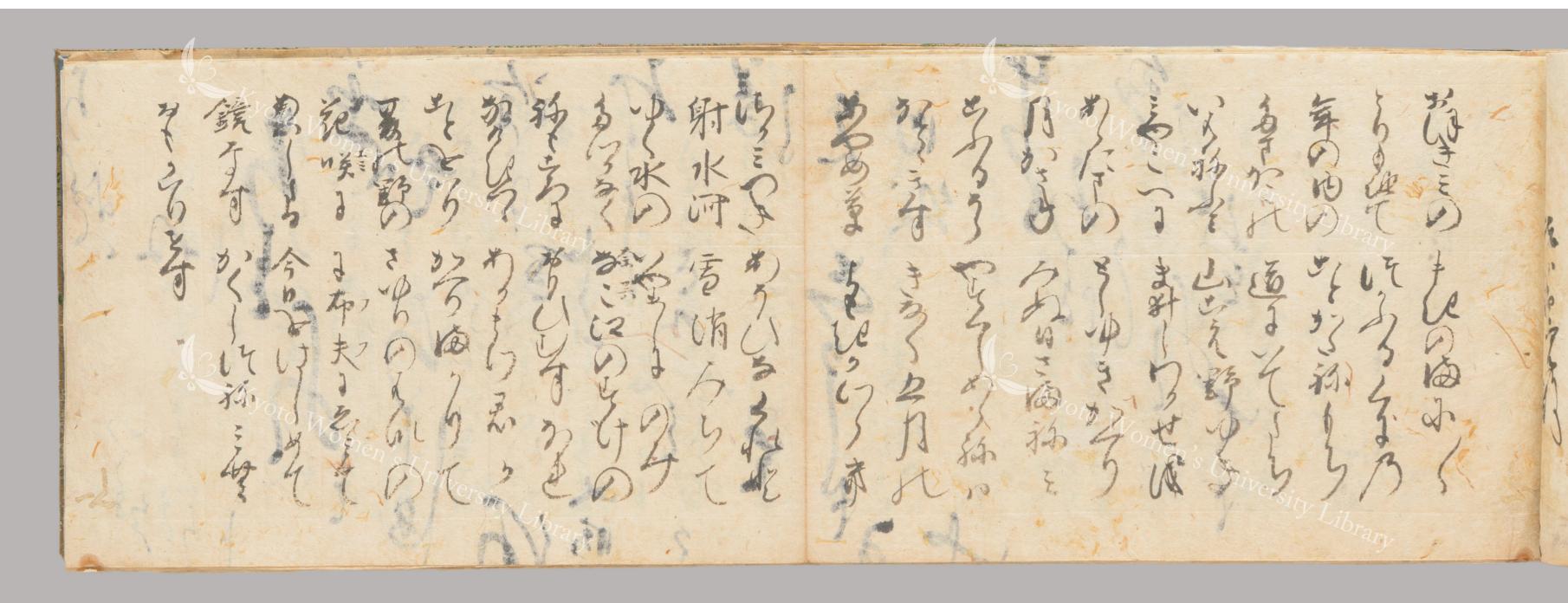
四一一一

すれぎれ うのあゆよ
傷あり 常世よわぢ
秋はこむ 魚せてゆくも
時一ぐの 香冬の葉
歌せよ おはれいん
うそひ 稲放さる
かす うち月夜
うそひ えくにあがりて
うそひ ひとえやりく
うそひ のそとしふき





四一四
四一五



反歌三首

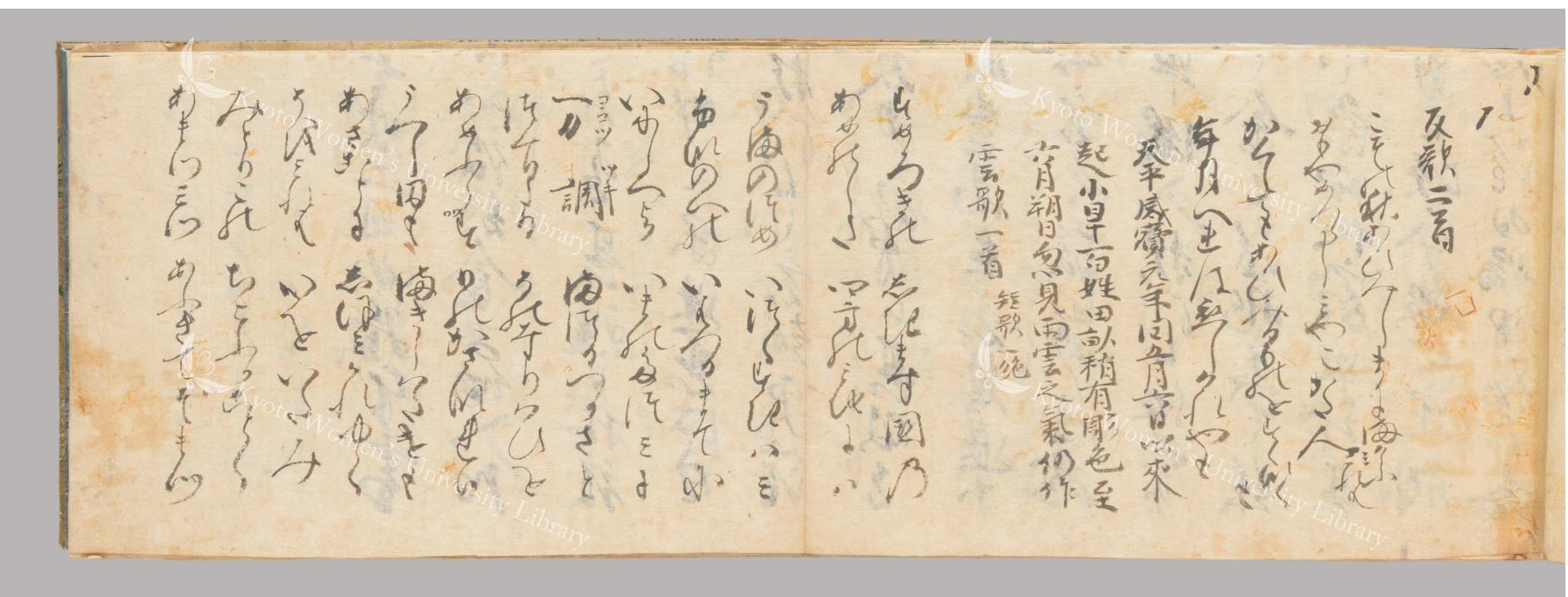
四一七

元林のうすすみのゆ
若葉のうすすみのゆ
年月のうすすみのゆ
天平感賀五年四月廿日來
起小早千百姓田畠稍有雨色至
宵宿宿忽見雨雲之氣仍作

云歌一首 短歌絕

四二二三

ひだりきれ おほす國の
あやめ、 はなめ
うぬのくめ はなめ
あいのれ はなめ
すくら はなめ
コヨツツ 調
ひらり はなめ
うねく はなめ
あまく はなめ
うねく はなめ
あまく はなめ
うねく はなめ
あまく はなめ
うねく はなめ

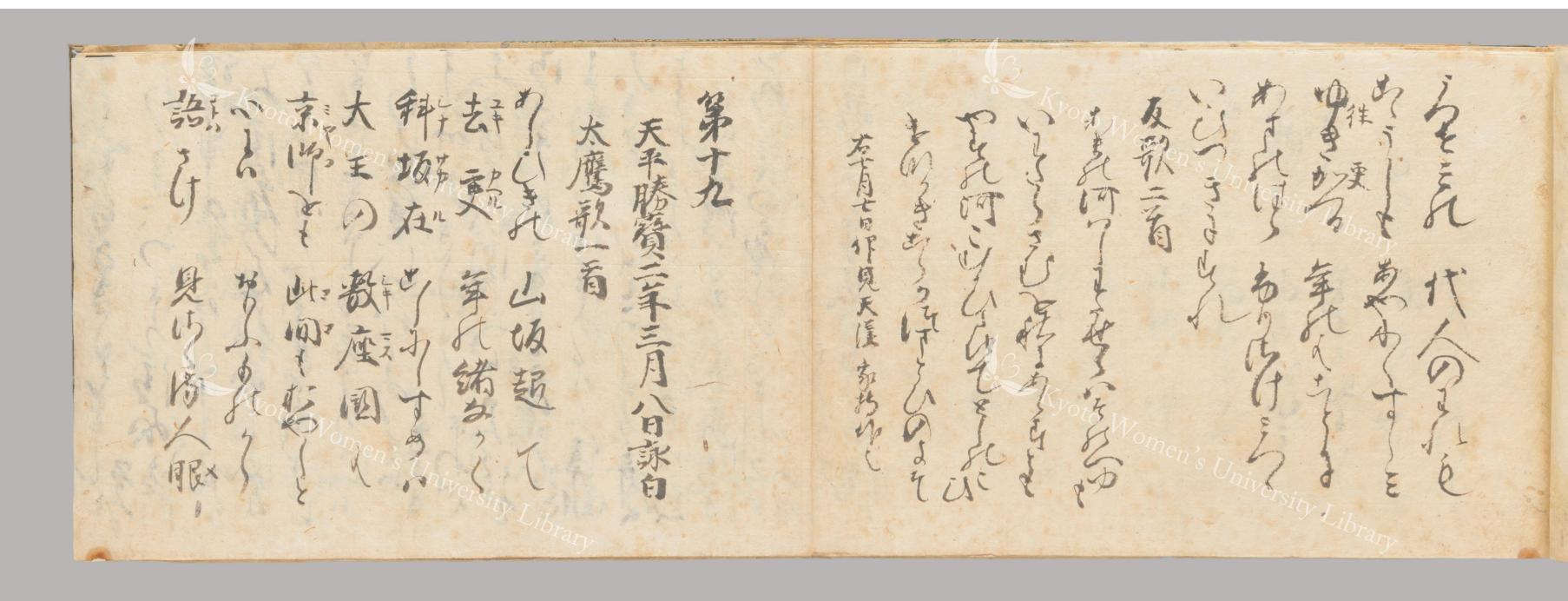


反詠一百

右六月一日晩頃守大伴喜持に
ゆきあらわすゆきむすび

卷之三

四一五



トモニ
うしゆ 擃うやむ
秋附 茅子にむり
石獣野す 馬みはゆ
子化にしよ 鳥あまく
内海の 小鈴もゆ小
舟せ舟 ありひじくつ
ゆきとけ へのしらす
ゆき延 らくまろ
枕附 すやのしらす
鳥應ゆひ とてても飼
真白部のあく

四一五五

四一五六

滑鷹歌一首并短歌

矢形尾のまくわ鷹す原
春去る 犬のいとく
もむろ 流聲サキ田ノ
河の瀬ト 年魚兒狹アツコ走
嶋津鳥 鶯養ヨウヤウへ
カリケ うつむゆき

天保中

紅の八垣ハヤシと
きこせら服フクの裸ヌケと
風カキりあはれ

紅衣レッドはつ舞マツメ田タチ

四一五八

四一五七

四一六〇

舞マツメ一走遠アキシ川カワ
劇カク八雲ハクモにそ何ナニか何ナニか

悲世ハシテ圓舞エンバウ章歌ショウガ一首イチヨウ

天テン地チの遠アキシ行ムめメ
俗コト中ノ常ノきミめメる

譜ヒ續ツル

天原アメノミコト思モリ見ミい

思モリ月ツキ見ミいシうシうシ

天原アメノミコト山ヤマの木キ赤エも

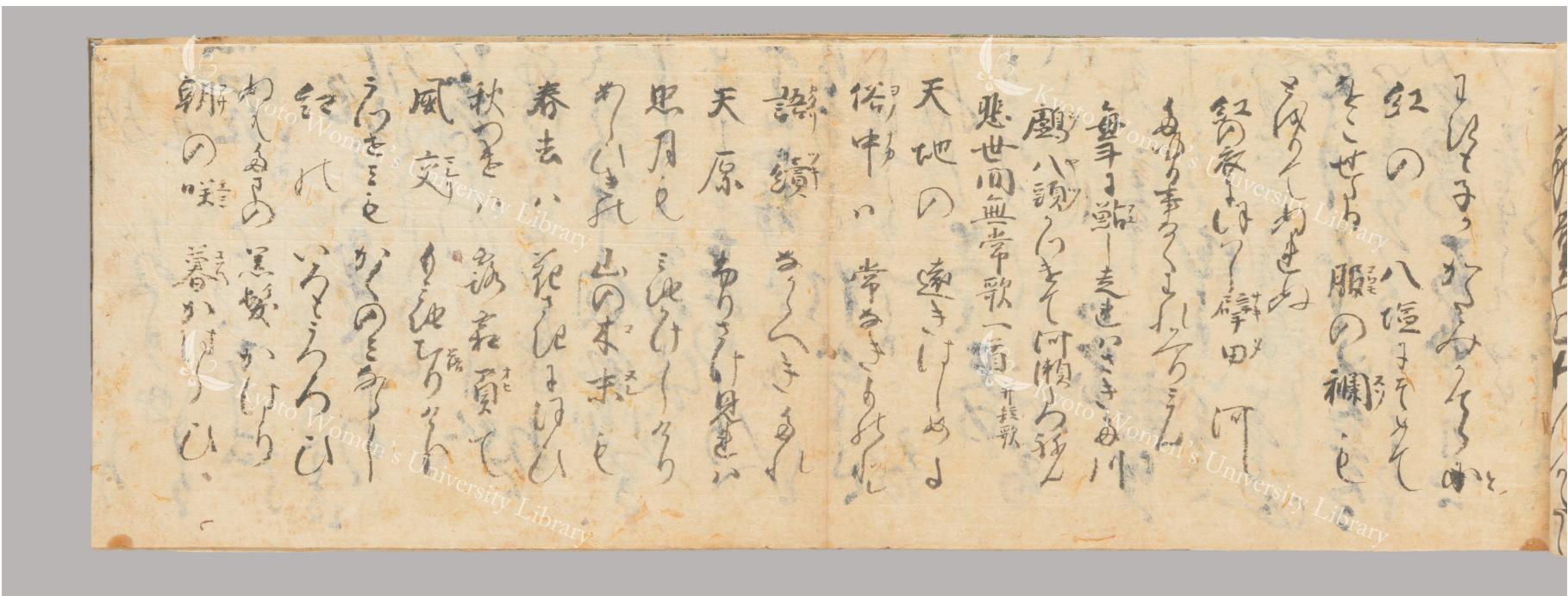
春去ハ花ハナ紅レッドひ

秋去ハ花ハナ紅レッドひ

風カキ文モダニ紅レッドひ

紅レッド衣ヒれ

朝アサヒのノ美ミ麗リいヒいヒ



此の書は元は京都の

歌の見本と

通水の本とある

常とあるうふ

もとつみすゆき

とめりつて

四一六一

四一六二

四一六四

言ふを本とし春に歌は
化ひくへ帝とみどり平
らをか言ふましの世間よ
情けきすとさむかとだき

慕振畫之名歌一首

ちのとの文代ミ幸

りう葉の母のミ幸

おほつか小情畫して

其子テウヤ

大夫やしづくアキ

樟弓弓をつね

後矢知也千尋財と

金辟

御之御

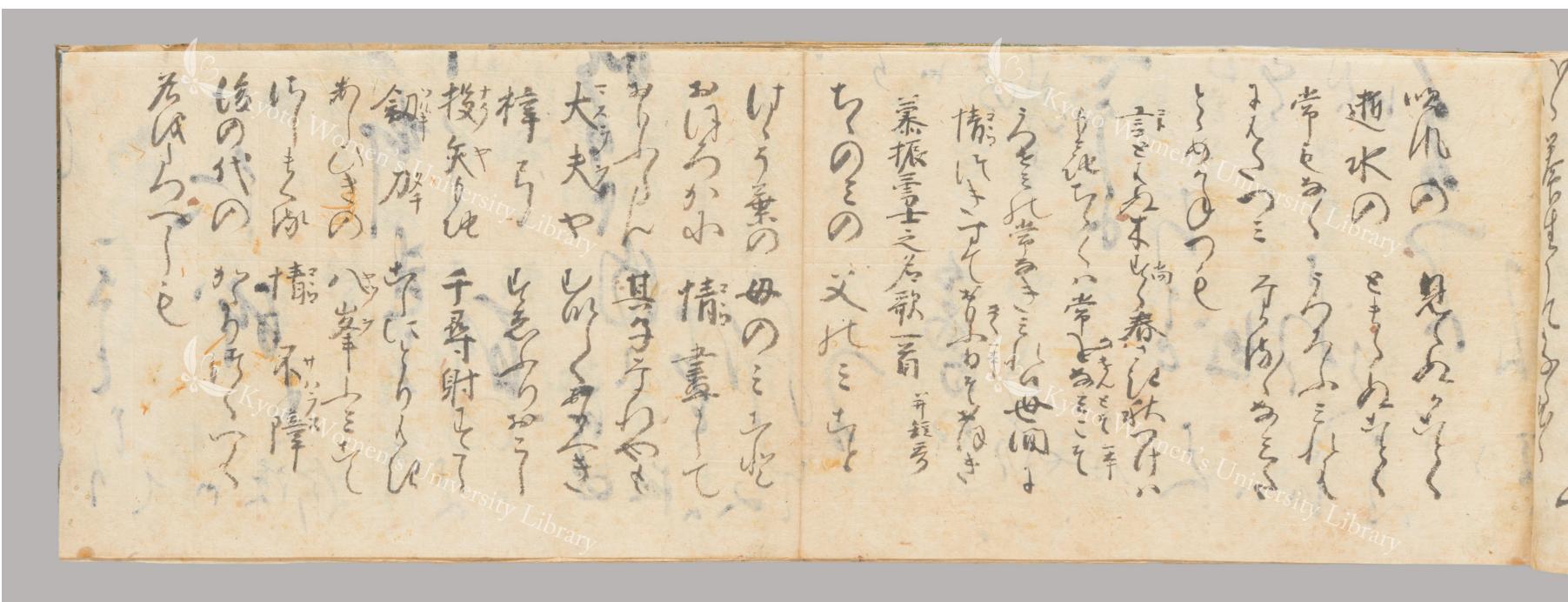
かの

情不障

該の代の

かのうつ

居はらす



四一六五

大夫若きうらわの代よ

同様人たがりけむ

右三首追和山上良臣作歌

詠霍丘鳥并特花歌一百

五首

四一六六

時うよ やうよ

八千種よ 草木花之よ

萬葉の音と更布

草木キテ 服ふくよ

ひきをひ ものうす

ありひて あうけよ

れれ乃 胸へそハ

よこりて きく寒ひ

しりて おちつまう

字の しげ真子々

萬葉

花記 極と

娘嫁う殊ぬくもじ

めりすけ 畫ハ云々

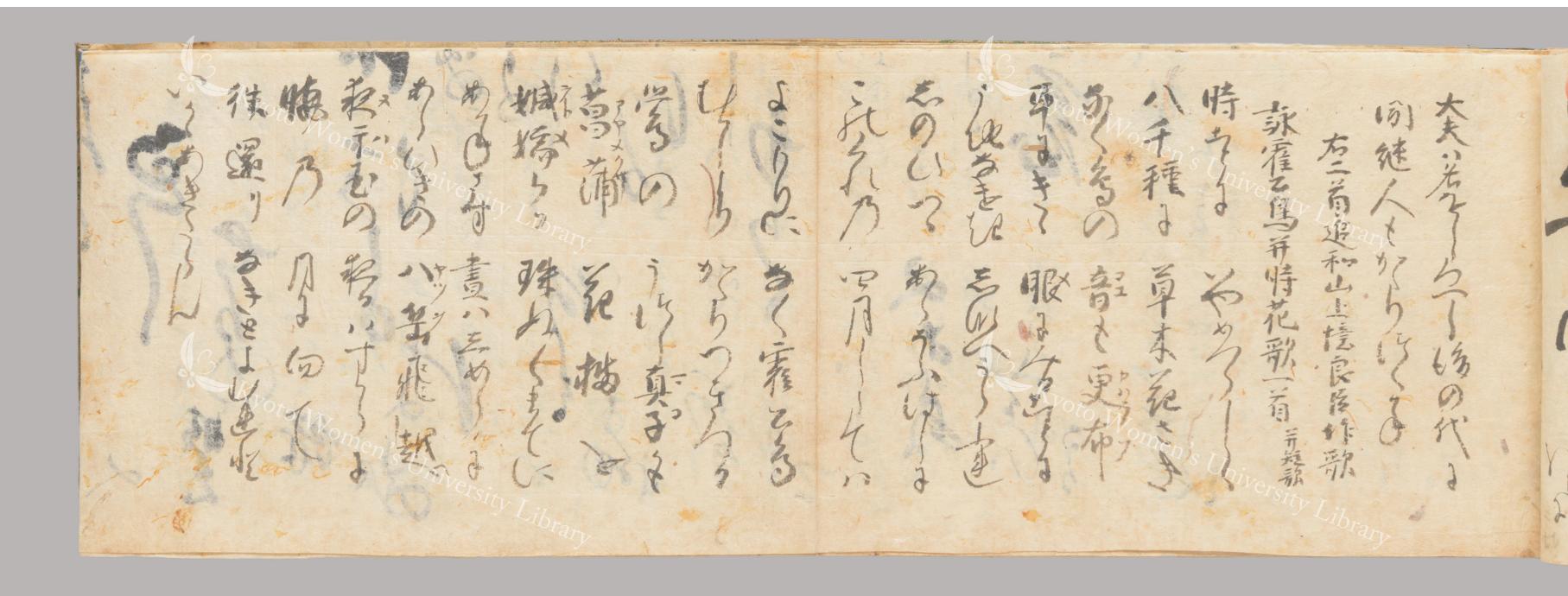
あきはめ ハサ飛燕

和元の音ハすよ

候運リ さきよ山車

月の向

往還リ さきよ山車



四一六七

久時かうしく呼夜
折木石斬見くくーく

四一六八

毎年しまくわゆるを

四一六九

きひのさくらあらわす
佐々木每年詠之等を以て
おサ日雅未及時依興詩作也
參家婦贈在京尊母所詠作歌
有并解歌

四一七〇

宿云馬 来うるを門
咲よやく 花猫の
香と吉 やの御詠の
御事よ もみじアラ
あきらむ いいすくわい
あらひきの山のゆきりよ
立雪と そのミタツ
立きくう やまとさくよ
立ふうく 今はれよ
立此海鶴の 滑脚
真珠の 見かけ 御面
松栢の さくします
蘚あづきミ はく御面の美
白毛のひゆゑと是を久

夷やくは連ひにまつは

四月三日賤越前判官大伴宿禰池主

霍云歌不勝國田之憂述懷一首歌

四一七七

曉歌ハ出ししりて
暮去ハすけ乃

見ゆまへ山

八葉ふ夜色しひき

きよの海石道花

えぬ春一ノ

獨り重きひ船捨毛

元より丁々毛の

利峰山飛越去て

明立以松の狹枝十

言法小印にひして

ちぢみ高吾貴まもゆ

鳴どよめ安窟不全宿

君とよやませ

無耳きけは不珍

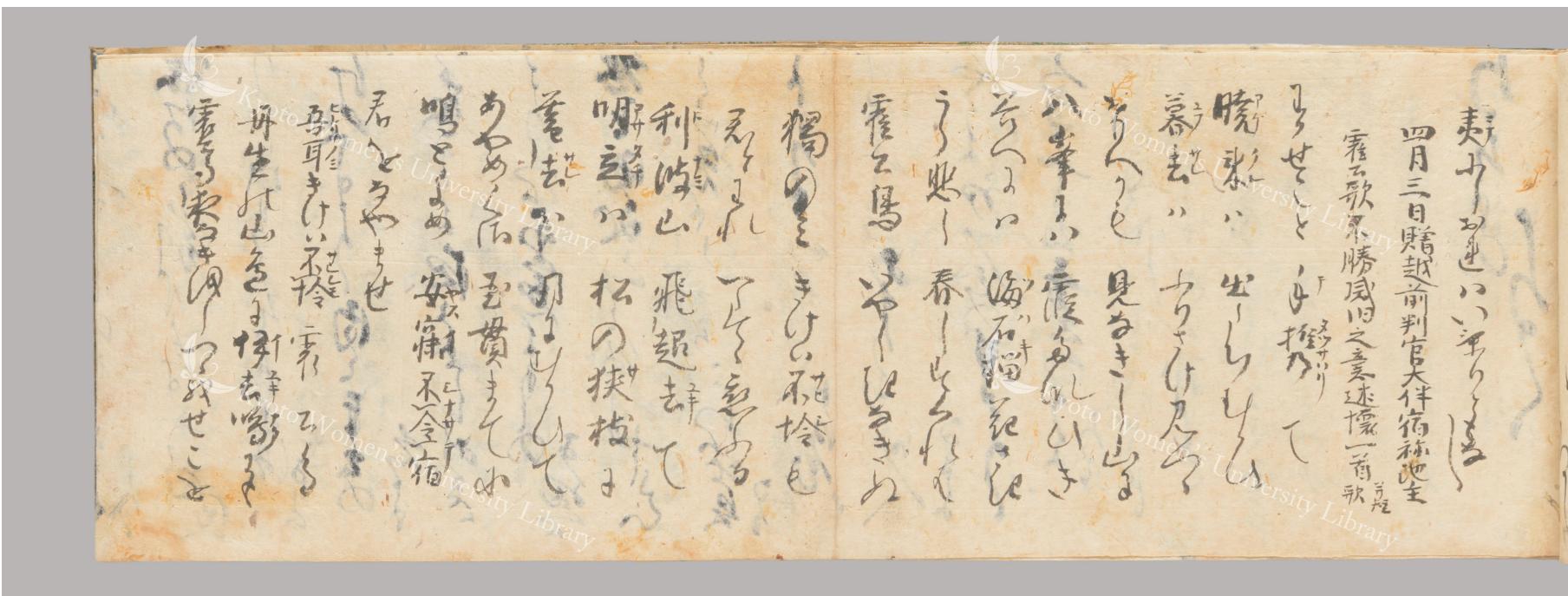
舟生山色すほ去歌

霍云歌宋年月つ歌せこせ

四一七七

四一七八

四一七九



安宿勿念病ゆめハアレ

未飽感霍ニ鳥之情遠懷作歌

一首并註歌

四一八〇

春過

夏来

あいの山しとみ
さか年よあく霍石名
りうすときけらう
名うて花石城
ねきゆく
はまとうきよこくもよ

尚トミノソ

四一八一

久秋三百
三月夜を曉月を秋月

きく夜をきけの月

四一八二

春子きく夜を洞く
ももとおもしおれいと鳴金

四一八三

春子きく夜を洞く
まつ葉をひづる

四一八五

諏山振衣歌一首并註歌

久きよハ恋び声す
眷きよし余じよ
引舉てわざわざす
見きよす
晴きよ

四一八六

きけ山の 鮎へよぢう
山振と 岸よ引とて
初めに ひきうなぎと
見ゆ。会ひにやも
あす

四一八七

山壁を廻りて谷を
走る。身をもとめ
古日遙覽布勢水海作量言
草木を 大大のもの
見る。青葉ひと
見あきらめ い原へんれ

布壁を 小舟けりの
ま、けい。身をもとめ
そす浦。霞のひま
うり始ふ 薙度。じて
噴きく。白波。こよみ
波く。島の海。まか
今日の。うち。年。れよ
碧玉の。りつ。時。り
あらがひ。見。まきゆ

四一八八

此布施の曲と
藤原の歌のうちでどうも
浦川のうつ年がひのえり
賀水馬鳥頭前判官在幕

四一八九

櫻の珠玉のあくび
遊ゆき了也
おもてなしの
叔羅河きりいしのり
平穏なじらひに
早き朝よ寫せまつて
月のりよそぞれを寄せ
けりとせこ

故郷に還れど此身は
鷗に立とうじぬれども

四一九〇

四一九一

玉の心事ありの会ハ

右九日附便贈く

詠雀鳥并藤花歌一首

四一九二

桃色トトロ 面輪マツルのトトロ
青柳シオノリのトトロき肩幅カミラバと
候エク西ニシ朝アサ新ハタチて

真鑑マジケン 盖カバ上ウエハ山ヤマアリ

此身のトトロ音ヨミ詰トコ色トトロ
半ハあよトトロ 鳥トリ飛ヒアリ

重月取シモツヅク おもむねびる

藤浪トトロのトトロ花ハナアリ

うきし光トトロ 神カミまことトトロアリ

深トトロく深トトロく

四一九三

雀鳥鳴羽重トトロかしき

盛トトロふトトロ 藤浪トトロのトトロ花ハナアリ

一云トトロ豆トトロ子トトロ二年トトロのトトロ花ハナアリ

同九日作トトロ

墨目賛判官トトロ久米トトロ昌廣トトロ延

雲トトロ集トトロ歌トトロ怨恨歌トトロ一首トトロ并短歌トトロ

此間トトロかトトロ うひしトトロみトトロか

口トトロせこトトロ 塙トトロのトトロ新ハタチアリ

四一〇七

61
才

もひる
ゆふれい 藤の手に三小
遙くは 鳴春ニ鳥
武庫の殖木 榆
花子の時
きすき
立木
古木にて
家居處多用
て本多主
お詫び
吾故許せば坐す
ひり國つ告の事と

春日化 榛ノ狭松
山木川 藤の手引
遙くよ 鳴露工屋
城戸の植木 摘
花子の時々
きすりき うひのうめ
花子の
家居春子用书
吉成許
Kyoto Women's University Library

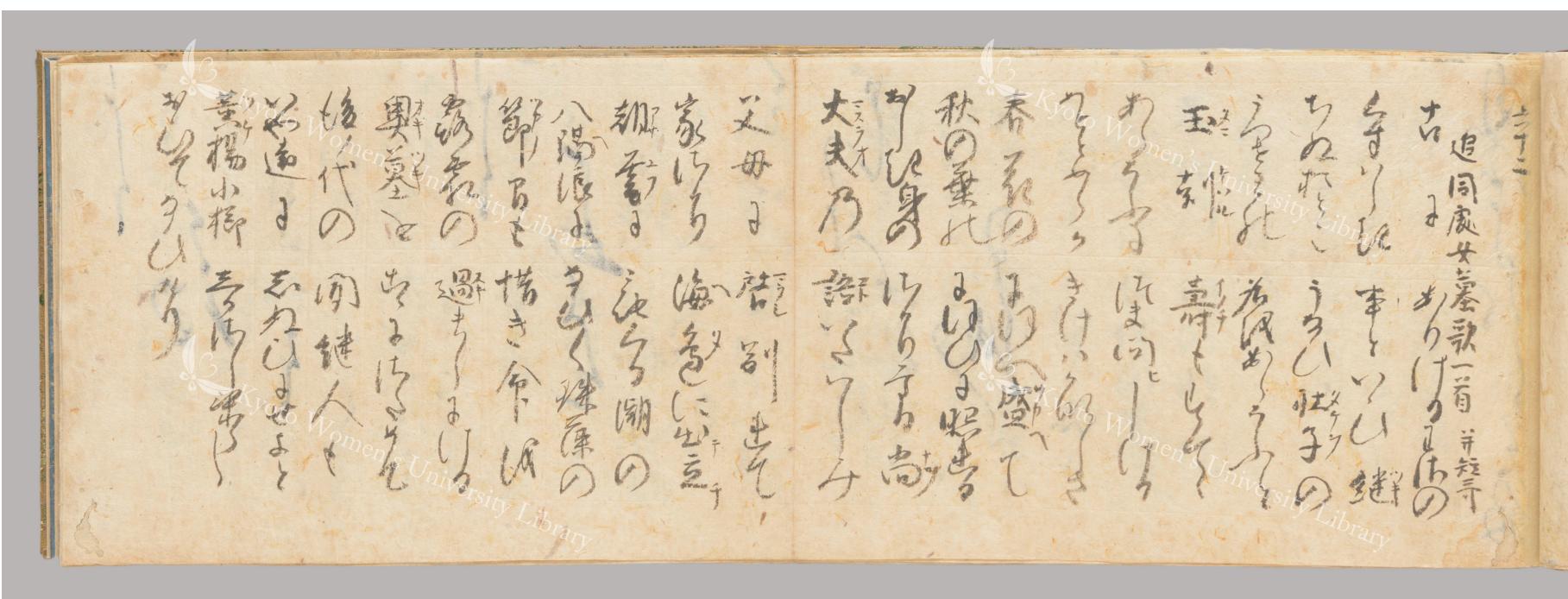
詠春石馬歌一章
丙戌年夏
四二〇九

四二一〇
Winters University Library
Wonders

さりて 榛ノ狭松
ゆふれい 藤の手けに小
遙くよ 鳴春玉鳥
武庫の Library
花学の 時とましわ
ちてきき うひうねに
花木の 古がはにて
家居書 そく書
ひり聞つ告ぬ事と
詠春集第一首 丙戌立
あくちく おやしと
こじくも ほのかと
りよひ せすうす
きくしの きくゆうり
めどと みどとをゆ
ゆくと あくとをゆ
ゆくと じくとをゆ
山にすすみゆ
あくとをゆ
山にすすみゆ

追同處女墓歌一首
古　　子　　ありげ　　の　　の
すりて　　まつし　　縫
ちねれど　　うき仕子の
玉　　玉　　寿　　と　　う
わ　　わ　　壽　　と　　う
香　　香　　め　　ほ　　り
秋の葉れ　　よりゆ　　せ
身　　身　　け　　け　　き
大　　大　　は　　は　　き
夫　　夫　　諭　　諭　　く

父母　　官　　別　　出　　を
家　　け　　海　　を　　に　　立
御　　お　　山　　を　　の　　湖　　の
八　　八　　高　　源　　よ　　え　　珠　　原　　の
節　　節　　石　　を　　持　　き　　金　　城
義　　義　　義　　の　　過　　ち　　る　　り
興　　興　　墓　　を　　ゆ　　く　　い　　を
後　　後　　代　　の　　國　　純　　人　　く
必　　必　　通　　よ　　を　　か　　じ　　よ
董　　董　　楊　　小　　柿　　手　　竹　　事　　す

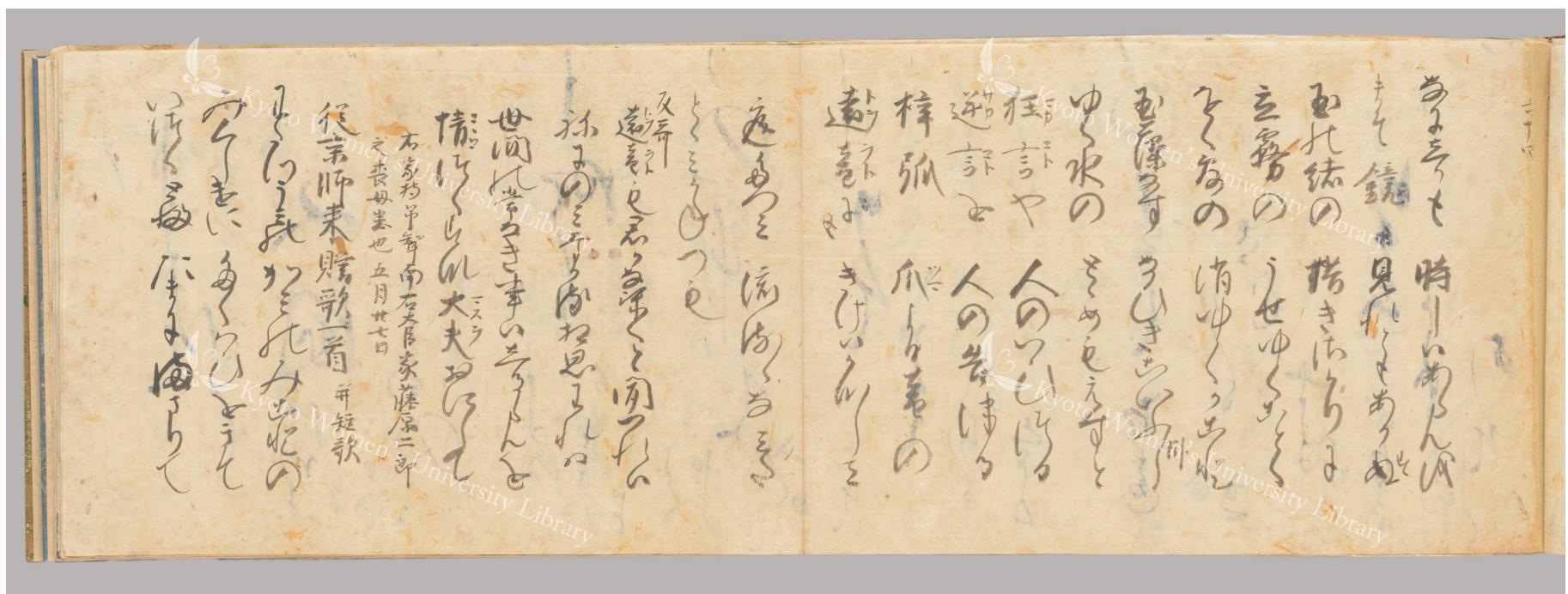


生氣の表と萬物小
右音符依典家教りし

挽歌音并短歌

天地乃初の時從
まし音の千伴の音
大王よたゞ御化
宣めより官才重ハ
天皇サム令ウシメ
夷役國政也此
めいきの山河アモ

聞そよ詠かトテ
多にめお見カキ通
四山多氣衝脅
玉杵の道人也
傳詣章語らくへ
け君の山ノ船
えねじて時より
世間ノうきくは
所を此
身の御内之命



四二一〇

四二一五

四二一六

わむらし わこよあきと
うをみせよ あかひづれ
まつやれ じまくまよん
まくら じまくまよん
けはれよ じまくまよん
かまくま じまくまよん
がまの じまくまよん
まくまよん
まくまよん
まくまよん

及乎
之
之
之

悲傷死毒歌一首
右三百大作の跡上
即女賄女ノ大嘆也
并短章
作主未詳

天地の御心

愛妻の写真
元祖

光 譜 噴 け て ま る
青 も ん じ く い し く い
University Library

Women's
Womans

本経より肩より受け
妻文部ニ

雅

四三六

四

卷之三
雪のもの

四二三七

四二四五

四二四六

平見入都 山跡乃因

青舟ノ 平城京師中

佐古の 三津子舟の
直瀬 日の入因

ははは つせの君城

ひまくのゆり

墨の絵 りと御神

船のへり づれじゆ

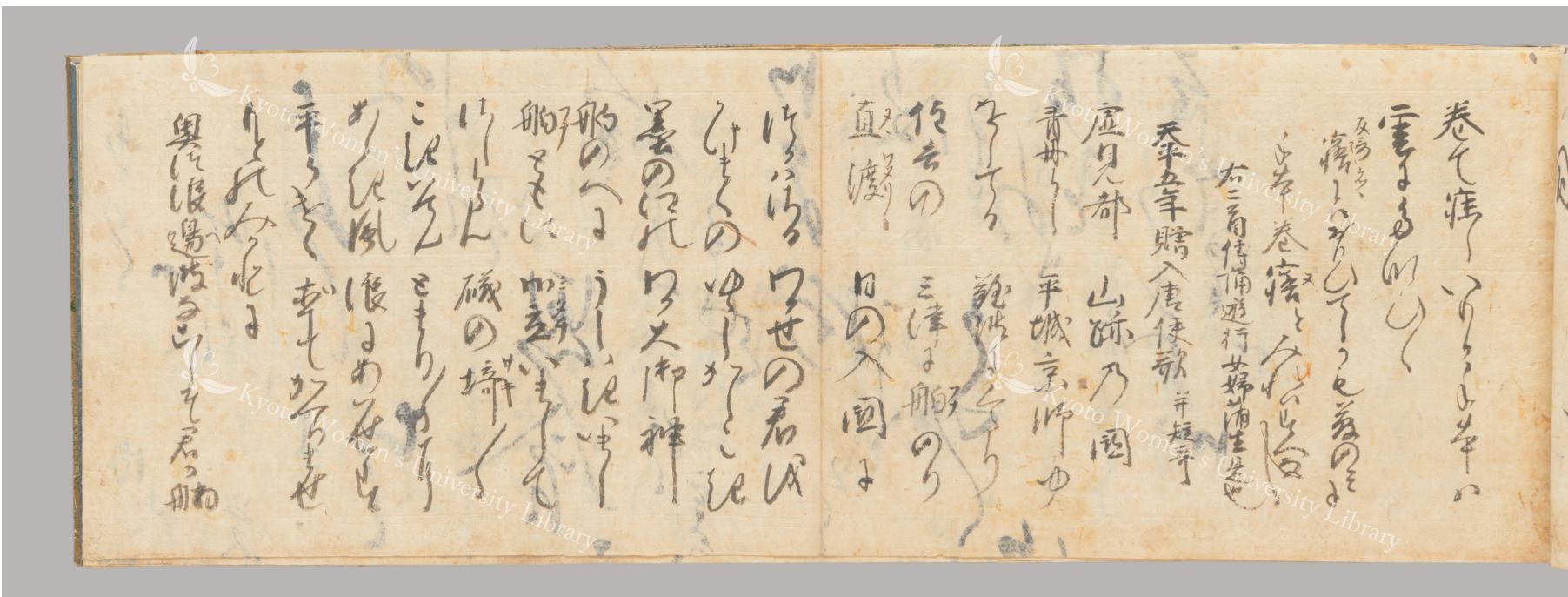
いりと 磯の境

こしと さとり

かく風 はるあね

平さき すぢにきせ

四二四六



向京路上依興預作侍宴應
詔歌一首 并短歌

晴嶋山跡國々

天雲す

磐船浮て

まに下

玉衣繁賀

わたり角

掃じ平クキ

千代累

わにわくよ

とよ

天れりつ

神ヨリ

吾仁皇乃

天下

山下

物

の

半友

の雄

撫

に半ひ

きの

の血

食

圓の

正方

れ人とも

若

しり

わたり

ト瑞

久

久

秋の暮の 我ゑくす

見てばいあまぬにまし

御見附 まゆづるの

ちいみよとし

秋物衣懸くあいと色引
見ゆましりゆきの彭風

勅使往高麗月日福信遣於
難波賜酒有入唐使蕃客酒清

等 御歌一首 并短歌

鹿見都 山跡國 波

水の人 地往如人

四二六四

四二五五

四二六五

為應詔備作歌一首 并短歌

りし飲酒これとよ御酒
又奇之四の船や江り米と白香著
朕裳の裾をすまひ
右發遣勅使并賜酒樂宴之
日月未得詳審也

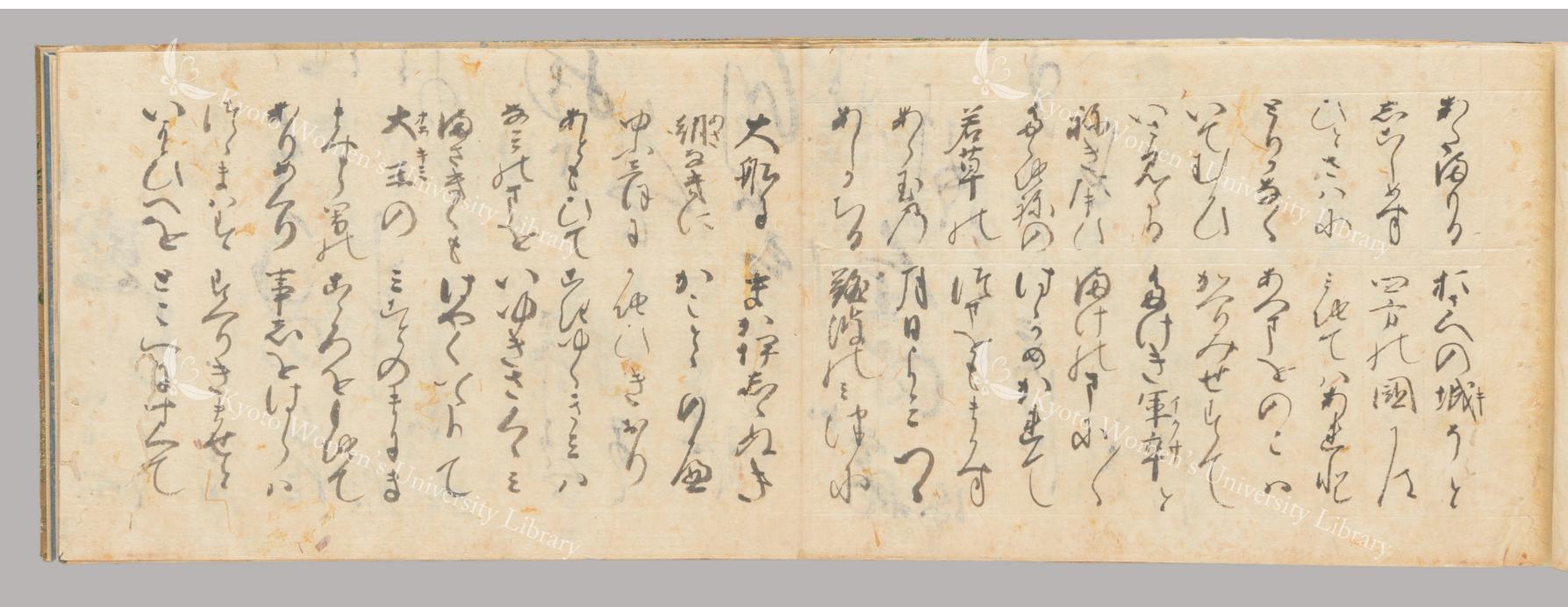
四二六六

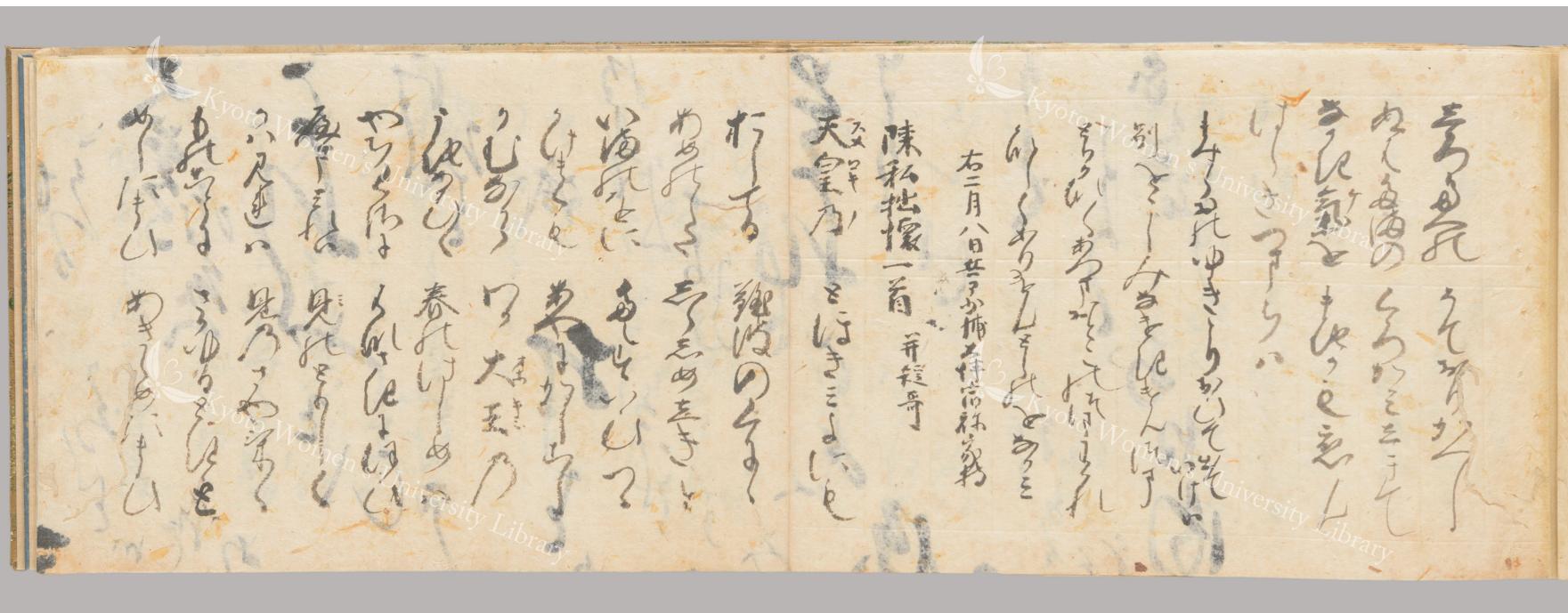
ういのハタのくは
とれ森や緑くよ
松根のまきまよし
青くよきれ京仰
て代り園手エレ化
アミモト大皇の
神うそがけくよ
豊ノ対り見をまよひ
みよのやまとわの
鳴山よあゆ 楠
また竹紙を放て
千葉ほきほきとより
えくよにゆつば
今うきよ

ス歌
追痛人悲別之心作歌三百
天皇内とれ朝延と
そわいの若葉の國し
第二十

四三三一

四二六七





四三六〇

四三一

四三二

陳私摺揚一首 并題奇

右三月八日共が拂上体當不義

72
才

此紙は、うつすの経緯の法
ナガラ宮ナカニシテナヌニ
御原御のまじめ御ア御
事トモタリハアハアハア
右三月十三日ナニ大極家持
倭文部守良磨二月廿日堂陸

四三七二

國部領防人使大臣七位上恩長
直人國嶋進歌數十首但拙劣
歌者不敢載之
めらかにあすけり
めりとすよやひはゆ
不破姓ひそわ
早代姓ひそわ
りもをあは
りくひくみゆとす
りくくまもよ

四三九八

為防人請陳思作歌一首

五款

大王乃々多かにみ
アラシがくさき
大夫の情すむ
ちよひのせばし
羨まほどうしき
平身としはけ
好去て卑邁采收
まもれおきよみ
もひて言語す
群鳥の字也そよ

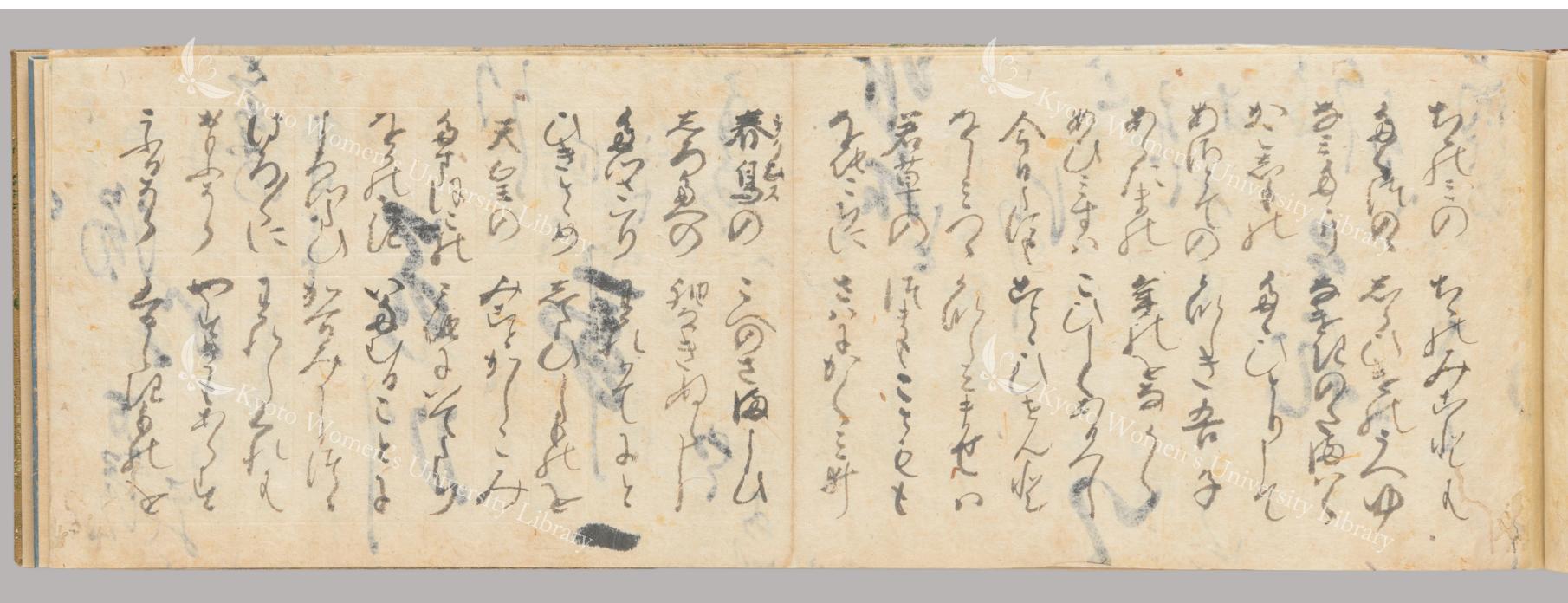
四三九九

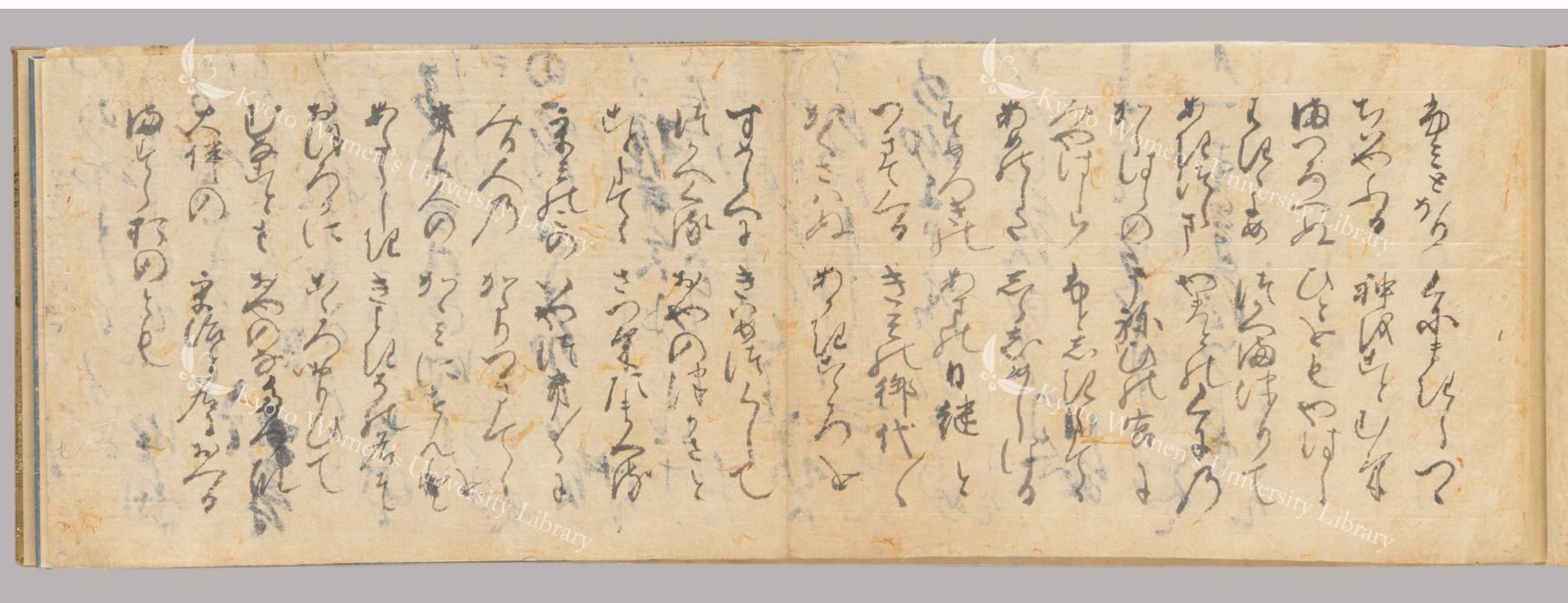
とこり
おとよ
やまく
中音
のまき
春露
あめの
けくに
れじの
きみう

四四〇〇

さくさく
ましに萬にゆうが
のひの年若の
音海
うてんじゆく
李本
唐方金懸列之清歌一首
大王のゆけれ
鳴寄る玉の池
いきのほせど
まかにむけれ

四四〇八





四四六六

四四六七

三九章此在是北國にあきる
若手の文の書くあらじよ
はくはくはくはくはくはくはく
とてとてとてとてとてとてとて
右綠淡海真人三船謡言出雲守
大伴吉長選宿称解任是以家持
作此歌也

